女鑑

東京國光社

明治五年　發行

第六號

女鑑第六號目次

美濃の弟媛



女鑑 第六號

女鑑

歳旦の辭

烏兎匆々暫くも止まらず。事繁かりし明治の廿四年も、今日と逝き明日と過ぎつゝ、何時しか暮れて、茲に又新玉の年を迎へつ。

鷄鳴晨を報じて瑞氣更に通じ、曉鐘夜を破りて祥雲これ粲たり。山河のけしき、草木のたゝずまひ、内日刺す都大路も、天離る鄙の荒野も、物として新ならざるは無く、處として春ならざるは無し。檐頭に高く掲げし日の國旗は、温く吹く朝の風にたなびきて、天壤と常しへなるべき國の隆の影を表し、門毎に立て連ねたる松竹の緑の色は、豐榮登る朝日のゐまひに光華まさりつゝ、千年も坐

さむ我が大君の、堅磐の御代の姿を示しぬ。各がじゝ引き延へたる尻くめ繩、取り重ねたる鏡の餅、長きは國の行く末にして、圓きは民の心なるべし。微陽未動かずといへども、君を祝へる席には、瓶梅一朶の春を告ぐるあり。鶯舌未饒ならずといへども、御代を賀ぐ會には、心華百篇の芳を競へる者もあり。見るとして瑞を極めざるはなく、聞くとして祥を盡さゞるはなし。之を四海波風起たぬ明治壬辰歳旦の大觀となす。

想ふに世の孃等は、斯る泰平の春を迎へて、洋々たる和氣の間に、龜の壽鶴の齡を加へ給ひつらむ。吾人も亦言の葉繁き筆の林、心淺からぬ硯の海の片邊に、恙なく青年を渡りおほせて、重ねて孃等と此の紙上に相見ることを得たり。

顧れば去年の半の程なりき。吾人は、一朝誤りてし教育の結果として、女德の

敗壞日一日より甚しく、醜聞を傳へ汚聲を流す者さへ有るに至れるを見、國家將來を憂ふる心、之を等閑に附するに忍びず、遂に自量らず、八月を以て本誌の第一號を發刊し、進みて指導誘掖の任に當りたりき。爾後時を閲すること茲に五月、號を重ぬること茲に六回、其の間未長からず、其の數未多からず、加ふるに、吾人の淺薄なる、未悉く世の狂瀾を防遏し、人心を感化匡正するに至らずといへども、幸に同志者諸氏の協賛と、吾人が一片至誠の精神とに因りて、大に識者の注目する所となりて、數千淑女の手に上り、其の聲價は頓に舊來の同類者を凌駕するに至れり。是に於いて吾人は竊に亦聊世道人心に裨益したる者あるを信ずるなり。是亦讀者諸君の自認め給へる所なるべし。吾人は今此の改曆の佳節に際し、既往を追懷するに、將來の事亦大に望を屬すべき者あるを

喜ぶ。乃益奮ひて反正の任を盡し、操觚の務を全くするに怠らざるべし。孃等も亦當に其の淑徳美風を涵養し、以つて他日の賢母良妻たるを期せざるべからず。

古に曰はく、一日の計は旦にあり。一年の策は一月に在りと。語を寄す。孃等が今日の心と、今日屬目の物とは、眞に孃等が他日の好摸範にして、決して忘るべからざるものなることを、孃等は清き心を君が代の頌に寄せて、陛下の萬歳を祝ひ給ひつらむ。丹き心を屠蘇の盃に浮べて、父母の壽を爲し給ひつらむ。あはれ、此の清き丹き誠心は、孃等が終生渝ふべからざる者なるぞかし。窮寒の中、屹爾として其の色を改めず、終始節操を一にするものは、門の松竹にこそ見給ひつらめ。霜雪を凌ぎて笑を呈し、花の姿の清標にして、徳の馨の

馥郁たるは、床の梅が枝にこそ見給ひつらめ。あはれ、この常磐堅磐の松竹と、馨りゆかしく狀淸らなる梅の立枝は、孃等が明らけき鏡ぞかし。孃等は、今日の誠心を以て永く君親に事へ、今日の明鏡に鑑みつゝ、夫にかしづき子を養ひ行かましかば、賢母良妻たるに於きて何か有らむ。さては忠勇義烈なる臣民を生し出で、國の光を增し、檐頭旭日の國旗をして、四海の濱に翩飜たらしめ、世界萬邦の民をして、我が大君の大稜威を仰がしむるに至らむ事も、難きわざには非るべし。

それ徳ある者は壽しと聞く。吾人は希ふ。孃等が常に其の徳を養ひつゝ、今日に變らず幾百年の新なる春を迎へ給はむことを。茲に歲旦の感を述べ、併せて祝規を爲すことと云爾。

論說

女子教育所感

檜垣直右

方今女子の教育上改良を要する點少からす、殊に普通の教育を施す所の高等小學校、並に高等女學校等に至りては、改良を要するもの益多し、先訓育上に就て言へば、女子を女子として教育するの道未完からす、往々女子として教育するよりも、寧男子として教育するか如き感なきにあらす、又學術の教授上に就て言へは、家事經濟を旨として其實用を慮り、其應用を務むるの注意甚乏しく、動もすれは文學的教授に偏向するの弊害あり、

將又女子の教育を耶蘇教者に托するものに至りては、大に考慮を要するものあ

り、蓋妙齢の女子は、多くは心志未堅確ならす、且事物に惑溺迷信し易く、畏怖恐懼し易き情性を有せり、然るに其教育を擧げて、之を彼の未我國の國体風俗、習慣氣風等、古來顯著なる歷史の事蹟をだに了知せざる所の宗教家に托するときは、假令品行の如き一種の束縛に依り、比較上稍瑕瑾少き利益あるか如しと雖、我國の女子にして教育すべき點に、大に慊然たるものなきこと能はす、現今女子の教育は、各地多少の異同之あるへきも、大凡右に陳述せる所の如し、是故に、女子の教育に注意厚き世の父兄は、妙齡の女子を宗教家に托して教育することの不可なるを知れり、又女子を文學的の教育のみに傾かしむるときは、徒に志望を高遠誇大ならしめ易く、貞淑勤儉の婦德を薄溺ならしむることをも悟れるもの丶如し、然りと雖、何如せん其教育すべき方法の未完からざるを以

て、之か父母たるものは、最愛の女子を携へて、殆其措置に困惑彷徨せり、豈亦痛嘆大息すべき事ならすや、

世間若、女子の教育方法は、後來之を如何にすべきと問ふものあらば、（女子終生の業務は修身齊家の二途に外ならさるは、之を語るの要なけれはこゝに贅せす、）余は、苟も女子を教育する所の學校にありては、其學科の讀書たり、作文たり、地理たり、歷史たり、理科たり、其他何たるを問はず、其教授方法は之を如何せは修身齊家の目的を成就し、其實効を得せしむべきかを深思熟考するに在りと答へんと欲するなり、果して斯の如くなるときは、他日女子か業を終へ、校を退くの日に當り、父母舅姑に事へて考順ならず、夫に事へて貞淑ならす、子を訓へて嚴方ならすと云ふことなかるべし、又一家を理して經濟勤儉を誤ることなきを信ずるなり、

國體と歌道

關以雄

別の貴と賤とを問はず、人の賢と愚とを論せず、年の長と幼とを擇ばず、性の男と女とを分たず、渾て人生の難艱娯樂、苟も情の動くことあるときは、之を言語に發せざるはなきなり、嗚呼と嘆ずるも感動の左右する所たり、悲哉と叫ひ、樂哉と呼ぶも、皆是情の指揮する所たり、抑も情の溢れて、言語之を表し、動作之を示すは、人生の常習にして、名けて輕躁とせられ、目して浮擧とせらるゝも、本是偶然の結果にして、貴賤の別なく、賢愚の差なく、長幼の分なく、男女の異るなく、必然あるべきは、數の正に明なる理にして、手の之を舞ひ、足の之を踏む所、又如何とも壓抑制裁すべ

からざるなり、然り而して高尚なる智能を有するものゝ感情の發作は、獨動作の之を著すのみならず、筆之を記して詠歌となり、後人の心に感せしめて、又後人を動かさしむ、所謂千古不朽之盛事にして、蓋之より優美なるものあるべからざるなり、

其れ特種の感情的成立なる我日本國にして、此感情的性質の文學あるは、豈偶然とすべけんや、殺伐凶險の風を矯めて、團欒優美の俗を作らんか、詠歌の學與りて最力ありと云ふべし、悖逆無道の暴戾を矯めて、忠信篤敬の良性に復らしめんか、詠歌の學與つて最力ありと云ふべし、奸邪讒佞の徒を矯めて、誠實寬厚の人たらしめんか、詠歌の學與つて最力ありと云べし、薄情殘酷の俗を矯めて、慈愛仁惠の風を起さしめんか、詠歌の學與つて最力ありと云ふべし、幽

冥に通じ、鬼神を感ぜしむ、歌の徳亦大なりと云ふべし、紀貫之曰、歌者動天地感鬼神と、誠に誣ふべからさるなり、古より詠歌もて風教を益したる多數の成績は、歴々として見るべきものあり、或は君をして仁に、臣をして忠に、父をして慈に、子をして孝に、夫をして愛に、婦をして貞に、兄弟をして友愛に、朋友をして信義に、或は歌舞に其の實を明にし、戰鬪に其の怒を解かしめ、飮宴に其の興を添へしめ、葬祭に其の誠を示し、羈旅に其の勞を慰め、慶賀に其の樂を叙べ、哀傷に其の情を盡し、喜怒に其の懷を記し、不平に其の感を訴へ、無聊に其の心を安んじ、窘窮に其の苦を散じ、感激に其の志を勵まし、或は山川に其の景を賞し、風雨に其の色を觀し、春花秋月其の感を序し、夏涼冬雪其の想を托し、或は神に禱り、佛に念じ、仙を學び心を錬る等、人事の百般、天

地の萬觀、悉之を心に發して、之を口に誦し、卷て己の志を脩め、舒へて他の情に感ぜしむ、詠歌の德斯の如く大にして、其人心を移すことの速かなる、豫想の外に出でたりと云ふべし、

蓋し詠歌の學は、我國休と親功なる關係を有し、皇統の連綿たると共に、詠歌の學を存し、上古素尊の八雲立の歌、神武帝伊那佐山の歌より、歴代の英主、今代の聖君に至るまで、悉く心を此の道に寄せ給はざるはなし、施きて公卿大夫より、田夫野老に及ぶまで、亦學ばずと云ふことなし、猶支那人の詩に於けるが如し、然れども、世上往々我固有の學科を棄てゝ、偏に漢人の糟粕を舐め、田を耕す勞を辭して詩作を想ひ、却りて詠歌の學を度外視する趣なきを能はず、其の身を日本にして、其の心を支那にし、彼をして喜ばしめ、我をして悲しま

しむ、風敎の腐爛して、人情の澆季に赴くも亦已むべからざるは、智者を待つて後知らざるなり、況んや其の精神を擧げて之を洋にするものに至りては、之を論ずるを欲せずと雖、古來の遺風にして、心に忠孝を存し、皇師に從ひて屍を馬革に包むの義勇心を誘掖するは、歌道を振興して、我國体を悉知詳明せしむるにあり、今にして善後の策を定めずば、將に斧柯を用うるに至らんとす、

本居宣長の翁の歌に曰く、

敷島のやまと心をひと問はゞ
あさ日に匂ふ山櫻ばな

女權の定義

武谷水城

男女同權と云ひ、男女異權と云、古より今に至る迄、一物二義ある事無し、一物二義有と云、其の一必僞義也、加之、同權說中亦字同くして義異るもの有、或は漠として其の定義を認難もの有、言者既に其義を異にす、聽者豈其解を異にせざるを得んや、是に於てか迷論謬說天下に滿ち、天資淑良なる女姓を駈りて、適從する所を知らず、終に其本性を傷ひて、身の尪弱心の過敏を招き、結局人間の組織を破壞し、社會の幸福を滅燼するの媒たらしめんとす、之他無し、權の字の義一定せず、解釋の異る事、猶其說の如くなれば也、請ふ其要を述ん、權とは、本來相對の辭にして、絕對の辭に非ず、則權利の謂にして正に義務に相對して生ず、其種類多しと雖、二種に大別するを得へし、曰法權、曰性權、法權とは、世態の進化に伴ひ、一國若くは一社會に於て成たる、公法の權力に

依りて、初生する權利にして、亦二種に分つべし、曰公權、曰私權、公權とは、何ぞや、指す所同からずと雖、要するに、憲法若くは他の國法に依て規定せられ、始て得有の權と爲るものにて、或一定の國民之を享有する事を得、例之ハ政治に參與するの權、兵籍に入るの權、官吏と爲りて國權の一部を負擔する權、等の如き是なり、私權とは、民法若くは他の國法に依りて規定若くは承認せられたる、人民各自の處世に伴ふ權利にして、民法に依りて禁止せらるゝか、若くは他の國法に依りて承認せられざる、條目を除く外は、一般の國民之を享有する事を得、例之は、相續、貸借、居住、特許、若くは財產授受、修繕、保存、等の如き、總て國家公共の事務外の各種の權利是也、(兩者の至細なる區分に就ては、諸說猶一ならず、中には兩性を帶るものあり、茲には固より大綱を掲

くるに不過）是故に兩者共に人爲法上の權利にして、世態の進化に伴ふて、此權利も亦進化す、之を古今に徵し、內外に照して、其度同からずと雖、苟も無限の未來を期して、天下無爲の仙境と化し去るか、將野蠻の昔日に還りて。衆人無政の魔界に陷るに非る以上は、決して人間界より此人爲の法を撤去する事能はず、又男女老幼宇內の民をして、悉く同一の法權を享有せしむる事能はず、假りに法外の天神ありて、一時の奇好に、老幼男女同一の法權を授與するとも、其受る所を能くする能はざる事、智者を俟て而後に知らざる也、是法の許さざるに非す、自然の之を許さざる也、眞理の之を許さざる也、此故に、今若男女同權論者有て、此法權をも男女平等均一に享有すべきもの也と唱ふるあらば、其誤れるや、炳として火を覩るか如し、

（未完）

史談

弟媛の事を記す

長屋基彦

美濃の弟媛は、景行の天皇御世の人にして、八坂入彦の皇子の女なり。四年春二月天皇美濃の國に行幸しゝ時、扈從の人々まをしけるは、「此國にをとめあり。名を弟媛とまをす。容貌うるはしく、姿やさし。召し出でゝ御前に事へしめ給へ」といふ。天皇聞めしうべなひ給ひて、やがて弟媛の家に幸し給ふ。弟媛は、現御神とます大君の、己か家に御輦をよせさせ給ふと聞き、大御稜威のおごそかなりしを恐みてにやありけん。大御志を知り奉り、面はゆく思ひてにやありけん。竹の林に隠れいりぬ。天皇かくと聞して、御思はいよよまさり行き給へども、爲んすべもなくておはしぬ。さて泳宮に入りまして、そこなる池に、こゝらの鯉魚を放ち、朝な夕な、扈從の人々と共に御覧じて、世をよそなる御遊びをよそほひ給ひけり。こは弟媛をおびき出で給はん設なりしなり。弟媛はかくとも知らず、鯉魚の遊ぶを見んとて、密

に池の邊に出で來りぬ。　天皇即仰せて留めしめ給ひ、妃となし給はんよしを告げ給ふ。弟媛れとみに御答もせずて、熟々思へる樣、男と生れて夫となり、女と生れて婦とならむは、人の世に得のがるまじきことわりにて、女子たらんもの丶男子に從ふべきも、古より今にかはらぬ道なれば、望むとも得がたかるべきこたびの大命になびき奉らむは、我が身のためこよなき幸にはあれど、年長けたると、幼きとは、自なる序ありて、弟は兄に先だつべからず、妹は姉を越ゆべからざる事、亦天地のことわりなり。思ふに、吾が姉君はいまだ嫁がずでおはせり。さるに今これを越ねて、獨まづ我が身の幸福を求めんは、即て其の序を紊るなり。又姉君には、御心ばへすがた容も、我に優りておはせれば、我をも召し給はんと思はせる大御心には、必かなはせ給ふべし。若かじ。姉君を進め參らせて、自退りなむには、さてこそ天地の道にもかなひて、大御心をもそこなひ奉らざらめ」と思ひ定めて、さて奏し上げ丶るやう、「妾女と生れいでつ丶も、男子と交ることを好み侍らず。今大命のかしこさに、辭み奉らむすべなくて、暫しのまこそ御前にはさもらひつれ。まことはものうくおもひ侍るになむ。さるが上に、妾が容止のいやしさは、永く掖庭に事へ奉

りて、花の朝月の夕の御遊にさもらひつゝ、大御心を慰め奉らんに堪へ難かるべし。妾が姉を八坂入姫と申す。容姿妾にまさりて美しく、志操もいといさぎよし。願はくは召し入れて事へ奉らしめ給へ」といふ。天皇きこしめし許させ給ひて、乃て八坂入姫を納れさせ給ひしに、御中らひいと睦しく坐しまして、七柱の男御子、六柱の女御子をさへ生ませ給ひきとぞ。

富みて貴きを好み、貧く賤しきを厭ふは、なべての人の情にして、己を先にし人を後にするは、大方の世の習なり。弟媛竹の園生に生ひ立ちたりとはいへど、天離る鄙の住居は、内日刺す都のうちのきら〳〵しきには比ふべくもあらず。況して、大君の御正嫡となり、天の下の大御母と仰がれむは、富みの極み、貴さの限りとも謂ひつべし。今の世の人の情よりいはゞ、己が身に利ありと知らば、君をも陥るべく、親をも顧ざるべし。誰かは長幼の序などに心をよする者あらむ。さるにても、弟媛が、かよわき處女の身をもちて、道を踐みて誤らさりし心の正しさは、隠れ入りけむ竹の林の、直き節にもたちまさり、義の爲に利をすてたりし志の潔さは、うち向ひけむ池水の、清き心にも恥ぢさるべし。あはれ、かの外國學にのみ心を寄する人

々よ。猶我が國の道徳は、三韓交通の後に起れりといふか。

節女お政の傳

吉田良春

お政は筑前國宗像郡赤間驛の商家の娘なり、其父は松尾七兵衛と云ひて、代々この驛にすみ、酒を醸してすきはひとせり、その家もと甚富みたり、七兵衛は同し驛より妻を娶りしに、一人の娘を設けて、早く世になき人となりしかば、再妻を迎へしに、是も一女を生みて、一年はかりにて身まかりぬ、先の妻の子を千代と云ふ、後妻の娘は即ち政なり、政は二歳にして母に別れ、四歳にして又父に別れぬ、父臨終のとき遺命して、嘉右衛門と云へるを養子として、千代に妻はせ、政は成人の後、本家なる七左衛門と云へるもゝの二男長次郎の嫁となるべしと定めおきしかば、親戚のものその遺言に從ひ、嘉右衛門を相繼養子として迎へ入れぬ、政は猶をさなかりければ、嘉右衛門夫婦の娘分として育てけり、かくて政が十一才の頃、嘉右衛門は、政か教育の爲とて、福岡の明石久左衛門と云へる貴き士の家に禿奉公に遣しけり、久左衛門と云ひしは文學を好みたる人なりければ、政か性質の教ゆべきを見て

深く喜び、行儀作法より、讀書習字に至るまで、懇に敎へ、剩三烈婦傳と云書を作りて、袈裟及び細川忠興の妻などの事を、詳に記して敎へしとなん、政の行儀の正しかりしと、容色の美しかりしとにより、その頃明石殿の了髮とて、評判高かりしと云ふ、かくて政は、十八の春まで明石の家に奉公してありけるが、俄に故郷より人來りて、政か暇を乞ひければ、政は本家へ緣組の事なるべしと思ひ、明石の家を辭して、赤間なる我が家に歸りぬ、此頃は政の家のみならず、本家なる長次郎の家も、災禍打ち續きて、いと貧しき有樣なりき、さて嘉右衛門が政を呼び返したるは、深き子細のあることにて、當郡勝浦村と云ふ所に、永島半五郎とて、豪富の大庄屋ありけるが、其子に新婦を迎へんとて、所々を索せる折から、政の事をきゝ傳へ、家貧しくとも、もと家柄の娘なればとて、手寄りを以て婚嫁の儀を申し入れければ、嘉右衛門は良き緣なりとて打ち喜び、かくは政を呼び還しゝなり、政は家に歸りて、事の由を聽き、亡き父の今はのきはの遺言と云ひ、云ひなづけの夫もあるを、今その貧しくなれるを見てこれをすて、富有の人に身を寄せんこと心苦しきわざなりと思ひければ、嘉右衛門夫婦並に媒酌の人々の勸めに從はず、明けくれ唯な

げきにしづみてありしかば、人々も其志の奪ひ難きを見て、その事しばし止めけり、大庄屋半五郎は、ます〳〵政の人となりをめで、如何にもして迎へんものをと思ひ、赤間邊の大庄屋など重き人々に媒を頼み、表向きより所望しければ、媒の人々は役威を以て恐嚇し、もし此緣とゝなはずば、家の後難はかるべからすなど屢々云入れければ、嘉右衛門夫婦は、とやせんかくやせんと思ひわづらひしが、此期に及ひて最早せん方つき、如何にもして政を勸め、婦に遣すべきよしこたへぬ、政は勝浦へ往かじとすれば、恩義ある姉夫婦の身の上に、如何なる難儀の出來るやらんも計られず、往かんとすれば父の遺命に背き、云ひなづけの夫に操の立ちかたければ、進退こゝにきはまりて、衣引かづきて打ち臥し、數日の間は髮も理めず、飲食をも絕ちて在りければ、姉夫婦もいたく心痛し、もし過ちもあらんかとて、常に政を視守らせけり、或日政は何思ひけん、枕輕げに起き出でつゝ、姉に向ひ打ち微笑みて云ひけるやう、今までの振舞殊に罪深うこそ覺ゑ侍れ、今より心を飜へし、御心に從ひ侍るべしと云ひければ、姉の喜び一方ならず、是にて我心も落ちゐたりとて、其日いすみ酒とて、隣家の人々など招きて、緣談のすみしをことほぎけり、宴終りて

後、政は隙をみて、先の尖りたる庖刀を持ち、裏なる納屋に入りて、頸も落つるばかりに吭を刺し、手を膝におき、うつ臥になりて死りけり、時に享和元年十一月九日の未刻にて、政の年は十八なりき、人々罪を懼れて深く之を秘め、狂死なりと屆け出て、郡奉行に賄して事僅に濟みしが、後十七年事終に藩主のみゝに達し、當時の郡奉行兩庄屋共嚴罰をうけたり、藩主は嘉右衛門に白銀十五枚を賜ひ政か貞烈を旌表し、墓を修め碑を建て、祭祀をも營ませられけるとぞ、此外政が書置きの事など、記すへき事多けれど、其詳傳は後日に讓りて、大要を摘みてかくはしるしぬ、

因に云ふ、政の家なる大黒屋は、今尙榮えて赤間にあり、其家に政が明石の家にて學び受けし百人一首あり、鏡も一面あれど定かならず、讀者もし西筑紫に遊ひ給はゞ、汽車にて門司より博多に至る中途に、所謂赤間の停車場をすぎん、是より七八町計りに政の墓あり、凝香潔操信女と題す、今訪ひ吊ふ人稀なり、請ふ往て香花を手向け給へ、

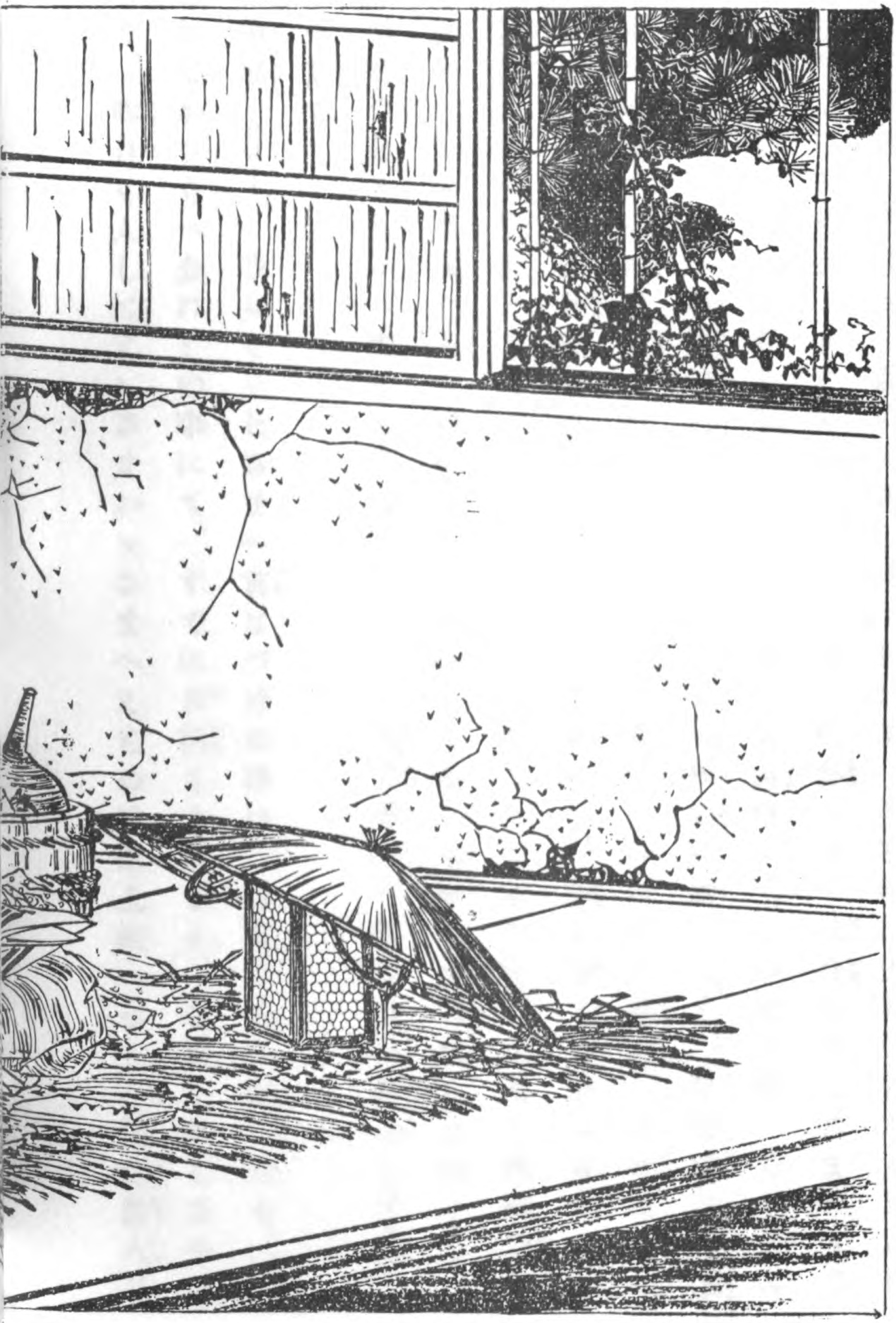
(附錄)政の事跡は頼山陽の物せしより、世人の知る所と爲りしも、彼傳は盡ぬ所あり、近頃吉田君帝國大學に在て、屢鄕里赤間驛へ、歸省の暇、精く政の事跡を

調べられぬ、本文は其綱領に不過、委くは不日氏の著にて明なるべし、茲に氏か集められたる古記中より、政の書置二通を抄録す、嘉右衛門夫婦に當たる文に曰、

一、わたくし事幼きよりとゝ樣かゝ樣にわかれ參らせ、只今のとゝさまかゝさまの御いつくしみに人となり參らせ、御恩は海山申つくしがたく候、しかるに此度の縁談とゝさまの御爲にも成候よし、又一族衆の爲にもと、早速御請申上筈に候へども、御存の通、わたくし幼きより言名づけの長次郎殿、近年はわけて世渡も覺束なく成行申され候、其はふれを見すて、今更變りてかつらへまゐり、我身ひとり榮花をきはめ候ては、長次郎殿へたち不申候、又長次郎殿顔も立、おや〳〵の遺言を守り候へば、只今のとゝ樣へ不孝に成行參らせ候まゝ、我身ひとつをうらみ、覺ごをきはめまゐらせ、先立不孝ハ御ゆるし願上まゐらせ、

長次郎へ當て

一筆申殘しまゐらせ、我身そもじさまへ言なづけの事は、申もくどふ候へども、此頃おしてかつらへ參れとの事にて、すでに日柄もきはまり、今更かなしさやる方なく、昨日も人してとゝさまかゝさまへことわけ申上候へども一圓御聞入な





く、却てたのみ候人まで、かつらへ参るを本意とすゝめられ、そもじ様へそへとの事は申人無之候、夫に付一しはそもじさま御身の上御痛はしく、我身ひとり道ならぬ縁を結び、身に錦をよそはひ候とも、世の人はさぞかし我身を義理しらずとうとんじ可申候、又此内とゝさまのそもじさまと不義せしとの御しかり、御尤なる御うたがひながら御情に預り候事ハ無御座候、只々言なづけの義理にひかれ、又先立給ふたがひの親々へ申譯、かれと云ひこれと云ひ、一方ならぬかなしさに、自害をとげ申候、かしこ、

聞く、政此日髪結ひ浴して清らにけはひ、衣裳を着替へ、櫛笄をもさし改めて、宴の中に心ばかりの暇乞を終へ、納屋に入りて物によりかゝり、兩手を膝の上に拱み、端坐して死しけるとぞ、さばかり難有節操も、長き年月掩はれて、誰聞へ上る人も無く、孝貞の跡は埋もれ、空敷狂氣の名を受て、寃を泉下に呑し事、哀しき例と申すべし、千萬金の富も、公侯爵の貴も、時によりては輕き事塵ひぢに等しく、人は心を知らるゝよりうれしきはあらじ、政、後邦君の旌表を忝くして、學者の記事の榮を擔ひ、今亦明治の聖世に紹介せられんとす、節女の心浮世に求

るものの無しとは雖、死者もし靈あるものならば、亦地下に感謝の意を表するなるへし、己また年來節女の事歴を調るに志ありし同國人、三笠の舍みつき附錄す、

家政

育兒小言（四）

武谷水城

佛蘭私の拿破崙帝第一世は、誰も知りたる歐洲近世の豪傑なるが、其布衣より興りて一旦大業を爲した根元たる耐忍の性は、特に母の感化に基きし事、其言に依りて證すべし、拿破崙の母は名を「レイテシヤ、ウマリノ」と呼び、性質剛毅にして決斷に長し、活潑にして耐忍強く、女子の技藝に熟達したる女丈夫にて、常に夫に屬して軍に從ひし人也、拿破崙幼き時より、天性粗放にして常規に拘泥せず、剛愎にして膽氣強く、常に同輩を侮辱し、特に其兄「ジヨセフ」をさへ陵ぎたりしが、日常業を母に受け、其謹嚴剛毅なる感化の内に成長したるが爲、大に事を含畜耐忍し、黜思して輕發せざるの氣質を養成したり、此氣質は全く母の行爲敎化に依りて、養

成せられしものにて、終身變せす、己が功名富貴は全く母の賚也と云へり、其言に曰、小兒成長後の行狀の善惡邪正は、全く母に關するもの也、我か生涯を高き所に引起することを得たるは、(帝位に即きしを云)全く母の敎養の賚なる事を知る、我か心志我が勉力、我か人に據らずして自ら治るを得たる事共の、大低は皆家に在りて、母の日常鞠養に依らさるは無し、我か位置、我か勳功、我か富貴、皆母の恩賜也と、此の言正しく身の上に覺えある、實驗實情より發したるものにて、彼母の性行と、拿勃崙の行爲とを比較して見る時は、其言の誣ざるを知るに足るべし、されば後に拿勃崙の傳を編む者、此事實を評して、誰人にても拿勃崙の上に在りて、彼を指揮訓導する事能はず、獨り其母慈愛の心緒と、嚴厲と公正との三によりて、彼をして其母を愛敬し、其敎訓に化せしめたり、彼は其母より順良の德性を傳受したるもの也と云へり、拿勃崙は斯く自身の實歷に依りて、母の行爲敎育の、國家の上に關するの大なるもの有る事を知り、婦女敎育の事にも熱心なりし人也、されは其成業の後、佛國一時隆盛を極し頃、或人、今佛國にて缺けたるものは、何なるべきやを問ひしに、拿勃崙答へて、今佛國に缺たるもの無し、缺たるものは獨り善母

のみと云へり、一言の意深きを見るへし、吁、東西國異に、俗同しからすと雖、善母の缺けたるの憂ふべきもの、獨り當時佛國のみならんや、獨り拿勃崙其人のみならんや、

拿勃崙の好敵手なる、英國の大將窩林登の母、亦有名の婦人にて、資性剛毅正直淑徳あり、窩林登幼き時、性質敏捷ならざりしかば、母は鈍物と思ひ、是を愛する事他子に及ばさりしも、其敎育は更に怠らざりき、窩林登は其貌の母に似たるのみならず、行儀作法より、其行爲思想に至るまで、一に其母に似たり、成人の後國家に大功を建て、公爵の尊に升り、功名富貴一身に集まりしも、是を以て功と爲さず、正直謙讓、小心寡欲にして、最も借財を恐れけり、曾て軍隊を率ゐて佛國にありし時、其農民貨物を攜へ、鄕土の難を逃れて英國の軍門に來り、其保護を受んと請ふものありし時、窩林登一書を裁し、英國の相に與へて、我輩多く金錢を借り、未た償ふ事能はざるに依りて、門を出てゝ債主の顏に對する不能と云へり、「モツレル」といへる史家、此事を贊美して、窩林登の功業多しと雖、此書牘の言より大にして尊きもの無し、三十年間兵馬の間に慣ひ、大軍の長と爲り、戰捷の功を顯はせる鐵心

石腸の人にして、借債を恐るゝ事此の如し、其正直の心知るに足れりと云へり、又嘗て顯達せさる前、印度にありし時、我殆三十五萬圓の金を贈るものありしを退け、身は極貧の儘にて、英國に歸りし事有、後の人云ふ、總て此人の大功業宇宙に充塞せしに係らず、盛德退讓の美德ありて、恰も新世界の聖人と稱へられし和聖東と、歐米一對の君子なりし事、其傳を讀む人の知悉する所也、此盛德謙讓の種子は、何人か是を培養せしやハ、彼母の行爲を知る人の、是亦是認する所也と、（未完）

女禮式（承前）

有住齊

供饌式

一熨斗鮑三方出し様

三方の腰のとぢ目を、人の方に向け、熨斗の廣き方を、右にして載せ、左手を手前の狹間に入れ、右手にて右の緣を持出て、榻際にひざまづき、貴人の方をうかゞひ、是を中座と云、やがて起ち出て、主客の中央に差置き、貴人の方に向ひて廻り、主客同等ならば、客の方へ向ふべし、中座したる所に下り、一禮して主客の禮終りたらば、再進み出て引

くべし、但一人の時は其方へさし置べきなり、（持出る高さハ乳通りと心得てよし、又下に置たる時は少しすゝめ、引くし、）（時は少し引出して持べし、）客あまた列座ある時、一臺にて進むる略法あり、其時は上客の少し下に持出て少しすゝめ、末座の客の坐より下の方にて一禮し、客一同に禮をうけられたらば、又進み出て引くべし、

一　一人に本、二、三の膳出し様

本膳はおもき故、左手を膳の下に入れてうけ、右手にてふちを持出て、梱際に中座して、客の様子をうかがひ、持出るものなり、さて上座の方へむかひたつなり、二、三の膳は両手にてふちを持ち、直ちに進み出てまゐらすべし、立時は、いづれも本膳の方にむかひてたつ也、（是は正面着座の時の据方なり、若し脇向きの座の時は、すべて下座の方よ向ひて立なり、）二の膳は、貴人の右の方、（我か左也、）三の膳は貴人の左の方（我か右也）に差置べし、

但招客の法は、第一に掃除を念入べし、床かざり、掛物、缾花等あるべし、或書に、四季の饗禮とて、春花、夏瓜、秋菓、冬火と出せり、是もまた心得てよろしからん、客來ありて膳のおそきはわろし、また座につくをみて直に出すも

宜しからず、茶菓をすゝめ、少し物がたりして見合せ出すべきなり、給仕通さもいふ、のものも、容儀よろしき若き婦女をえらむべし、躾なきものをば用ふべからず、給仕のものはかりそめにも足腰をなで、髪をもてあつかひ、かゆきをかくなどの事をつゝしみて、手は膝の上に置事と心得たるがよきなり、又客の顔を視るは失禮なり、仰がず俯さず、心を客の方にくばり居るべし、手長と云ものは、庖厨人よりうけとりて、持來り、客座の次の間まではこぶを云、さて給仕のものにわたすなり、客一人に、給仕二人、手長二人と云事、舊記にあれど、凡そ見斗ひにて、あへたる定めも有まじ、饗膳に、七ッ物、五ッ物、貳三獻等の、ことぐゝしき作法あれども、今は絶てみる所なければ、省きて記さず、實用にあつる服紗料理の、三汁八菜、二汁五菜、一汁三菜をあげてをしへとす、三汁八菜は、本膳に汁一ッ菜三ッ、二の膳に汁一ッ菜二ッ、三の膳に汁一ッ菜二ッ、外に臺引向詰焼物な云、と云あり、二汁五菜と云は、本膳に汁一ッ菜二ッ、二の膳に汁一ッ菜二ッ、外に向詰ある也、一汁三菜は、本膳ばかりにて、外に焼物有無適宜なり、二三の膳向詰まで出して、飯汁兩三度再進したる時酒を出す

を中酒と云、是は一廻して（盃を廻すにはあらず、酌の者の廻るなり、）又飯をすゝむるなり、此盃は塗盆にて向詰臺と引換にすべし、されど座席せまからずは、引換におよばず、吸物取肴等出すべき順序、其他のあつかひぶりは、追〳〵に箇條を次第して云べし、（右の外、二汁七菜と云もあれど略す、）

一片側列座膳出し樣

片側に列座の時は、人數に隨ひ、膳を一行に持出て据う、（一行とは、一二三四と後よつき行なり、）いづれも下座の方に向ひてたち、末座の者より入るべし、二三の膳をすうるも同じ心得なり、惣じて進退起居遲速なきやうにすべし、されど末座のかよひは少しはやく、順〳〵にたちゐする如きは、見やすかるべし、

一兩側列座膳出し樣

左右兩側列坐の時は、人數に隨ひ、膳を二ならびに持出て、左右とも下座の方にむかひて立べし、すべて前に同じ、

一上座歸り膳出し樣

客多人數にして、通ひ（給仕なり、）すくなき時の据方なり、まづ通ひ兩人ならび出て、左

右上坐の客にすゑ、一行になりて退き、次の通ひ兩人並び出て行ちがひ、其次の客にすうべし、すべて出るものは両端を二行に出て、入る者は一行になりて中を通るなり、かく打代り絶間なく据るなり、

一千鳥掛膳出し様

客人數多く、座席狹き時の据方なり、客の人數にしたがひ、一行に出て、たとへば十人の客左右にあらば、一三五七九の通ひは、左の客にすゑ、二四六八十の通ひは、右の客にすゑて、十の通ひよりさきにたち、九以下次〱にあとにしたがひ、一行になりて入るなり、

一燒物出し様

三の膳、臺引まで出す時は、本膳と二の膳との間の、手前に置くべし、三の膳なき時は、三の膳の所に置が法なれども、後世是を向詰と云ひて、本膳の前に置く事となれり、

一臺引、出し様

三の膳ある時は、本膳と三の膳との間に置くべし、二汁七菜の時は、燒物を三の

膳の所に置き、臺引は向ふに置べし、式正には臺引物は、通ひの者持出たる時、主人座を立ち受取りて、客前に進み、自ら挾みて出す事なれども、女中方にハ、臺のまゝ据ることになれり、
但臺引を受る時、汁椀か食椀の蓋を受取りて盛て出すもよろし、本式は小皿に盛りて向詰の膳か、少しあきたる所ある膳に、付込むなり、

家內衛生（五）

三笠舍主人

食物の續き

米、は五穀の主なるものにて、滋養分に富み、印度以東の國民は、大低食用と爲す、歐羅巴及亞米利加にても、全く食せぬには非るも、主用と爲さず、我邦にては古來よりの常食なる事、云迄も無し、種類多かれ共、其性分は大なる差無し、能搗きて十分に表被を去べし、良米は粒大く、其端尖りて透明也、是を煮れは膨脹す、其滋養分は澱粉最も多く、其外少量の蛋白質、脂肪、及二三の物質を含む、近來米と麥との滋養分の比較、消化の難易に就て、種々の說われ共、質際にそれ程必要と云に

も非ざれは言はず、但同し米の中にても、糯は常に餅に製して食す、餅は胃の強き人には障り無きも、胃の弱き人には間々害あり、又無病の人にても、過食すれば甚た胃を傷ふ、總て米麥及豆の類は、新古に依りて格別功害無きものなれ共、中に就て新米は胃に渟滯し易し、古米を混するを良とす、米を煮るには總て柔かなるべし、硬き時は胃を傷ひ易し、米を貯ふるには乾きたる場所に於てし、毎七日に一度攪き混るを良しとす、然せざれは虫を生ド易し、米に生する虫に二種有、邦俗にては單に米虫と稱するも、歐洲にては一を「ガランデル」、一を「ウォルフ」と云、

麥、は米に比すれは需用廣く、產地も從て多く、遊牧の野民を除く外は、世界の人民殆と食用と爲ざる者無し、種類多くあれども、小麥を第一と爲し、大麥、燕麥、裸麥、皆之に次ぐ、米と同く人の身を養ふに要用の者にて、其用法は米に混へて飯と爲し、又蒸餅、温飩、等に製して食す、其外酒、醬油、味噌、等を製するに用ゆ、就中蒸餅、は歐洲往昔よりの食品にして、其需用最も多し、麥の滋養分の主たるものは、矢張澱粉にして、其外植物性蛋白質、脂肪、等猶數多の物を含む、其内に「チエルローゼ」と稱ふるもの有、此者通利の力あり、故に麥を食する時は、便通を能く

するの効あり、是を以て夏時抔には、常に米麥飯と爲して食する時は、胃腸を疎通して多少疾病を豫防す、胃腸に渟滯し易き人、及年々脚氣病抔に罹る人是を用ひて効あるものゝ有は、此理に依るものなるべし、又飯後其他日常にても、茶の代りに麥湯(麥を焙りて茶に代用するもの)と爲して用る時は、同し効あるべし、但し屡下痢するものには用ひざるを良とす、

豆、にも種類多し、豌豆、蠶豆、大豆、は其中の主たるものにて、植物性食物中にては、最も多く滋養分を含むものなれ共、其性堅硬なるが故に、十分に煮るも消化し易からず、胃腸の病ある人は食せざるを可とす、亦胃弱の人にあらざるも、焙豆の如きは多量に食すれば惡しく、我邦にては大豆の如きは、多くは味噌等を製するに用う、又角豆は菓子に多く製す、通利の効あり、煮たるものは腐敗し易し、砂糖を混すれは之を防ぐを得、

芋類、の中にては甘薯、馬鈴薯、滋養の力多く、需用多し、里薯に山薯之に次ぐ、中に就て甘薯は、我邦にては要品の一にして、如何なる瘠地にても繁殖し、饑饉を救ひ、細民を助くるのみならず、沖繩其外四國九州の或地方にては、常食と爲すも

歐米各國下等の民は、是を無上の食餌と仰ぐ、薯の性分は少差あるも、澱粉、脂肪、及少量の蛋白質等を含み、滋養の効多し、但甘薯は馬鈴薯よりも糖分を含む事多し、故に其味ひも美なり、兩品共に煮又は焙りて食す、或は煮たるものを乾し、碎きて粉と爲し、用に臨み團子と爲して食す、此法貯蓄に便なり、其外酢又は酒を製す、但馬鈴薯の春日芽を發する時は、「ソラニン」と稱ふる毒質を含み、大害を爲す事有、決して食べからず、

野菜類、は總て新鮮のものを撰ぶべし、多く煮て食す、我邦にては又鹽漬と爲して、常食の助食と爲す、其未熟のものは胃腸を害し、夏時抔には疾病を誘ひ起す事多し、十分に熟漬するを良しとす、此野菜中蘿蔔、胡蘿蔔、蕪菁、等は糖分其他の滋養分をも少く含み、食して益あり、葱、韮、等は多少の滋養分を含むの外、兼て胃を刺戟するの効有、茄子は腐敗し易からざるも、其皮は消化し難し、柔かに煮るを最も良とす、其外瓜類特に黃瓜の如きは消化し易からず、胃の弱きものは、食せざるを良しとす、南瓜、胡瓜は腐敗し易し、古きものは食すべからず、又多量に食するも惡し、西瓜も亦然り、

多くの蕈類、は總て消化難く、滋養の効亦少し、中に就て松蕈、椎蕈、香蕈、茅蕈、青頭菌、シメジ蕈、の類は食して害なく、味亦美也、且最も新鮮のものを撰び、暫時米泔汁に浸し、能く洗ひて後に煮るべし、此外性質不明の蕈類は一切食すべからず、中には毒を含みて、爲に人命を斃すもの有、最も注意すべし、

海苔及昆布、其外日常饌に供する海草類にも、多少滋養分を含み、昆布の如きは猶「ヨジウム」と稱ふる物質を含む、適宜に食すべし、過食すべからず、

胡椒、山葵、芥子、生姜、等い總て食物の消化を助くる爲に用るものにて、是を進食料と云、適宜に用れは、食機を進めて衛生上に効あるも、過用する時は害あり、印度の人は特に此等の者を過用すと云、是は熱國に住む人は、身の消化運營の機能總て鈍き故と知るべし、印度及西洋の人は、此外に桂枝、茴香、肉豆蔲、抔をも進食料として用うと云、

菓實、は總て新鮮にして熟したるものを用べし、梨、柿、林檎、桃、等は能く熟すれは、其味美にして、多少滋養の効あり、蜜柑、枸櫞、の類は、胃腸を清涼强健にし、心意を爽快ならしむるの効有、葡萄も熟する時は味美にして滋養の功あり、い

つれも適宜に食すべし、過食すれは胃腸を傷ひ、下痢を興す、特に未熟のもの、及採取後時日を經たるものは用うへからず、虎列羅の流行病ある時などは、一切食すべからず、此外梅實は生食に適せず、梅干と爲して適宜に食すれは、食機を進むるの功あり、又無花果は採取後直に食すれは多少滋養の効ありと云、枝を去りて時を經たるものは用うべからず、此等の果實は總て適宜に食後に用うるを佳しとす、

茶事（承前）

藤井行麿

○朝會は、明六ツより遲くとも五ツ時までなり、夜こみにつゞきてするときは石燈籠油煙洗ひおとすべし、

○朝飯後は、火相をつよく爲おきて、迎へこみ、菓子を引てすぐに點茶すべし、客も中立せす、ひとりつゝつくばいに出、替り〳〵手水をつかひ、手間とらぬやうして席にかへり入べし、暑中には簾をぬらし、露のまゝすこし短くかけたるすゝしげなり、茶入袋をかけす、裸にして飾たるおもしろし、風呂の茶は古人種々にせられたり、小暑の時は、濡釜にてむかへ入、中暑には風呂に灰をうつくしくして炭を置、

火をさゝず、釜は勝手にかけおき、膾炙を出し、酒飯すみて膳をひき、下火を臺十能に入持出、風呂の炭一ッ二ッぬきて、其跡へ火をさし、たぎりたる釜を水にぬらし、持出かけて中立さすこともあり、また大暑には初入に呂風釜を出さす、風呂の坐に水さしばかり出し置、振舞し客中立したる間に、勝手にかけ置たる風呂釜運び付、水さしを水指の坐におき直し、其外飾つけ常の如くして、客に後入さするも、はたらきありておもしろし、

○正午の茶は、客席入して十二時の時計きくやう、相互に主客とも注意すべし、仕方はまへにいへるが如し、

○晝飯後の茶は、大かた朝飯後にひとしき、菓子の茶なれども、氣とり朝よりは花やかなるよし、茶すみて酒など出さは、別席に轉座させてしたる方、殊さらに興あるべし、

○晩は黄昏の茶ともいふ、くれまへに客を席中へむかへ込、まづ薄茶を點のち膾炙を出し、なかばより燭を出し、庭中の石燈籠、待合の行燈などにも、のこらず火をともすべし、ふるまひすみて中立のゝち濃茶點べし、

○夜會は夜ばなしともいふ、此會は五月より八月までは催しがたし、二種一盌、茶桶など出しあつかひておもしろし、

○殘火、一會すみて其殘りの火にてまた客を招待してする茶なり、茶入に茶をはき、袋をかけ、花も入替なをして客をむかへまつ菓子を引、茶を點、また惣菓子を出し、薄茶ばかりにても、酒飯出しても、

○蹟見、貴顯其他珍客したる跡へ、その賓客の由緒ある人か、または知音の人か、あらかじめ沙汰なし置て、飾を見するなり、まへの客退出あらば、引續湯相火相のかはらぬうち、のちの客席入するやう、早くよりきたりて別席にて待合せたる都合よし、前の茶の飾あらためず、すべて其儘、茶入も袋をかけず、はづしたるまゝ點茶すべし、

○晩の臨時は、火をともさぬうち、一會始終するやう、催をいふ、風呂は中置にして、茶入茶碗のみ持出る、

○不時は、時刻いつといふ定りなく、客を見かけて催ず一服なり、八式（生茶會大茶會、數茶、番茶、口切、並一服、二種一盌、香之茶、

○生茶會は、床飾、臺子飾、棚飾、平飾、長盆、丸盆等すべてかざり付を見するなり、爐の時節には、其座敷に鑵を仕掛おく、風呂の時は、ふろに炭はかり置て火を不入、點茶は別席にてするなり、室町家にはじまり、豊公北野に於て、名物珍器を出し、陳列せられたり、

○大茶會は、天正十五年六月筑前國箱崎の松ばらにて、大閤さつ摩凱陣の時催されしか初めなり、細川玄旨、加藤嘉明、利休、宗及、道安、宗湛等、おもひ／＼に草庵を作り獻茶したり、その後京師にてはたひ／＼催されたり、

○口切の茶といふは、其年の詰、茶つぼの口をはじめて切てもよはす會の事なり、十月に至、ゐろりを明て催すゆゑ、開爐のことをおもひたかへたる人おはし、昔は茶壺を賞玩し、これを重んし、出來作を見立、銘など付して秘藏したり、さるにより壺飾の式とり／＼に傳來せり、席中客前に於て、裝束をはづし、小刀にて封を切、茶を出し、これを挽て點るなり、

○並之一服といふは、天正年間利休の催たる百會の如き仕方なり、豊公つねにこのみなし玉へり、

○二種一碗といふは、濃茶の二種を、茶碗一つにて點るなり、茶の試撿せしにはじまる、

○香之茶は、香具を出し、初入より飾置て、主客相たがひに炷合て興するなり、春雨梅雨などのころ、徒然なるに催し、雪月花のをり〳〵もおもしろし、名香か、また香爐名物等所持あれば、とりわけておもしろし、

十交　貴人、開、壺、遠客、盃石、移徙、餞別、弔慰、雨中、花見歸、

○貴人、高位の御方を招待する會なり、壁のぬりかへ、疊の表替など注意すべし、席中褥を敷おきて奉迎すべし、かけ盤足打折敷用意すべし、箸揚枝の類、みな紙包になすべし、御相伴人と一樣ならぬがよし、天目臺天目等にて献茶す、されども侘人の數寄屋などに招請したる時は、わびの風流、また格別のことにて、ただ清潔を盡すのみ、茶盌一ッにてもするなり、薄茶の時、御相伴の人飲てのち、また二服目御好みあらば、茶盌二度滌ぎにすべし、又茶碗別にしたる時は、献茶の盌は洗ひて棚に上おくべし、

○開、茶器何しなにても、貴顯より拜領したるを、初てつかひて人に見するなり、

この外由緒ありて他より讓をうけたる品、又は名器、あるひは世に賞翫のもの手に入し時などもすべし、但し名物と賞翫とは差あり、混ずべからず、名物は、天下の名器、賞翫は近古となく世に聞つたへて、人の珍稱するしな、所謂中興名物の類なり、また拜領のしなは、今燒の新物、何にても恭しくあつかひ、盆にのせなどしてつかふべし、

○名殘、古茶の入たる壺をはらひ切をいふ、壺のなごりなり、新茶の口切まへ、八九月のころ大壺を明小壺にわたし、其小壺を飾て催す會なり、これを風爐の名殘とひがこゝえしたる人おほし、まちがひなり、

○遠客　友の遠方より珍らしく來訪したる時は、秘藏ものなど出してもてなす茶なり、膾炙料理ものには、西國人には東國の産物をもちゐ、東國人には西國の珍物をとり合せ饗應すべし、壺飾などするは尤馳走なり、

○盆石、國々の名所か、またわがこゝろに叶ける景色を、おもしろく石もてぼんにたち、床に飾て催すなり、かけ物は、詩歌あるひは文がらにても、すべて山海木石によりたる語あるものおもしろし、圖繪のたぐひはかくべからず、初坐よりかざり

置とも、また後坐に出すとも適宜にすべし、

○移徙、わたましの茶は、新宅うつり、また座舖びらき等をも兼たり、木地ものをもちゐず、漆器をむねとつかふべし、かけものハ雨中の畫、あるひは瀧山水雲龍のたぐひ、すべて水によりたるものおもしろし、

○餞別、此茶は行と歸ると二ツあり、旅客國に歸る時、また國の人旅立するとき兩樣なり、海上船路をゆくを送るには、手水鉢の杓、また盃など出すもうつ伏せにせず、花入釣船などもちゐて、出船にして挿花したるおもしろし、

○弔慰は、喪にこもりたる人をなぐさむるため催す茶なれば、其心して招請する人に、由緒あるしな、墨跡など、かけ物に表裝してかけたる、ことに馳走なり、

○雨中、風雨烈しき時は、軒の下に手水鉢または片口などを出し置て、客のこまらぬやう注意すべし、

○花見歸、夕方より夜にかけてする會なり、花をいれず、さら〲となに事もかろくすべし、

學園

和歌のしるべ（つゞき）

井口隆太郎

結

結は、すべて動詞及助辭にして、これにも三の差別あり。之を分ちて三段とす。

一段の結　動詞及助辭の第三段

二段の結　動詞及助辭の第四段

三段の結　動詞及助辭の第五段

左に其の表を掲げて、如何なる動詞ハ如何なる語尾にて結ぶべきかをしらしむべし。

第一動詞四段活

		加行 開
結にならず	第一段	か
結にならず	第二段	き
一段の結	第三段	く
二段の結	第四段	く
三段の結	第五段	け

佐行	押	さ	し	す	す	せ
多行	打	た	ち	つ	つ	て
奈行	往	な	に	ぬ	ぬ	ね
波行	逢	は	ひ	ふ	ふ	へ
麻行	住	ま	み	む	む	め
良行	釣	ら	り	る	る	れ

右に擧げたる動詞は、語尾の四段に變化するを以て、四段活と云ふ。此の動詞は、第三段と第四段の語尾同じ。故に同じ語尾にして、一段の結とも二段の結ともなるなり。

圖中に擧げたる動詞は、唯一つの例を示せるのみにて、此の圖にははたらく動詞はあまたあり。其の一ッ二ッをあぐれば、

加行には　飽く、咲く、欺く、仰ぐ、喘ぐ、動く、活く、勞く、浮く、抱く、嘯く、游ぐ、驚く、聞く、呌く、置く、鳴く、泣く、燃く、乾く、赴く、

背く、繼ぐ、搔く、書く、等

佐行には　明す、顯す、悶す、冷す、散す、示す、足す、記す、過す、糺す、晒す、倒す、臥す、干す、鳴す、果す、直す、正す、成す、明す、照す、沾す、隱す、越す、等

多行には　勝つ、消つ、分つ、放つ、毀つ、持つ、育つ、立つ、保つ、滿つ、斷つ、等

奈行には　死ぬ、但此より外にはなし。

波行には　商ふ、祝ふ、誘ふ、息ふ、疑ふ、負ふ、養ふ、窺ふ、悅ぶ、奪ふ、遊ぶ、失ふ、習ふ、呼ぶ、行ふ、弛ぶ、歌ふ、敬ふ、醉ふ、擇ぶ、等

麻行には　步む、食む、睨む、望む、勤む、組む、苦む、惡む、慰む、摘む、惠む、靑む、勇む、惱む、染む、等

良行には　削る、求る、足る、曇る、氷る、籠る、祟る、等

此の圖は充分に熟讀諳記して置かざれば、他の動詞の活と紛ふことあり。以下動詞の圖もまた同じ。

但(たゞし)圖中奈行の第四段は、其の活きを有せず。此の奈行の動詞の往、死は、下の三段活の活きを有すれば、彼(かれ)と照(てら)し合(あは)せて見るべし。

第二動詞上一段活

		結にならず 第一段	結にならず 第二段	一段の結 第三段	二段の結 第四段	三段の結 第五段
加行	着(き)	き	き	きる	きる	きれ
奈行	似(に)	に	に	にる	にる	にれ
波行	干(ひ)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ
麻行	見(み)	み	み	みる	みる	みれ
衣行	射(い)	い	い	いる	いる	いれ
和行	居(ゐ)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ

右に擧げたる動詞は、語尾の一段に變じ、其(それ)にる‖れ‖の副(そは)りて活く故に、上一段と云ふ。上とは下一段活に對(たい)して云ふ語(ご)なり。

此の圖も四段活と同じく、第三段第四段は同じ語尾にて、一段の結とも二段の結ともなるなり。

圖中に擧げたる動詞は、唯一例を示せるものなれども、此の活に活く動詞はいと少し。

奈行には　煮る、

波行には　簸る、　嚏る、

夜行には　鑄る、

和行には　率る、　[illegible]る、

此の圖も熟讀諳記しておかざれば、まがふことあるべし。

第三下一段活

此の活は、今日普通には皆四段活に活かして用ゐることゝなりたれば、此處には要なきをもて省く。猶これを知らんと欲するものは、文典につきて見るべし。

百人一首和歌の解（つゞき）

井口隆太郎

凡河内躬恒

心あてにをらばやをらん初霜のおきまどはせる白菊の花

白菊の花を折り取りたいと思ふけれども、今朝は初霜が眞白く一面に置きわたしてあるから、どれが花やらさつぱり分からん。困たものである。然れども外に仕方がないが、あのあたりに非常によい匂がしてある。大かたあそこにあるだらうから、自分の心あてに折りて見よう。よもや間違はあるまい。白菊の花と云ふものは、どうも結搆な匂がしてあるものだから、こんなに初霜がおきまどはしても、心あてに折つたならば折らるゝだらうから、折りて見よう。

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別よりあかつきばかり憂ものはなし

自分がかねぐ戀しく思つて居た人と、やうく逢ふ事が出來て嬉しいと思ふ間に、其の夜はあけて有明となつたから、仕方がなく其の人と別れたが、其の別は實に心につらかつた事である。左樣なつれない別を夜のあけ方にしてからこのかたといふものは、每朝く夜のあけるころになると、其のつらい別をした事が思

ひ出されて、曉ほど憂くつらいものは無いやうになつた。

朝ぼらけ有明の月と見るまでによし野の里に降れる白雪

坂上是則

しら〳〵と夜のわけゆくから、窓の戸を開けてずつと遠く眺むると、丸で有明の月が照りかゞやいて居るかしらんと思はるゝまで、野も山も里も家も一面に眞白く雪が降つて居る。さても〳〵奇麗な今朝の雪のけしきではあるわい。

朝ぼらけは、夜のしら〳〵と明けゆく頃を云ふ。有明の月とは、夜のあくる頃、空に殘りてある月の事なり。

春道列樹

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

柵と云ふものは、流れて行くものを止むる爲に、何處の河にも人がかくる物であるが、今此の山河を見ると、人のかけた柵ではなく、風のかけた奇麗なしがらみがかゝつて有るが、あのしがらみは、外の河のしがらみとは違つて、山々の木々の葉がもみぢをして居るのを、風が吹きおとして、河の中も埋まるほど澤山水の

上に散り浮んだから、流るゝ事も出來ずして止まつて居るところの紅葉である。丸で赤地の錦でこしらへたしがらみの樣で、實に奇麗なことではあるわい。

紀友則

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

霞はうら〱と立ちこめ、鳥はいかにも嬉しそうに鳴き、實に人の心ものび〱として、こんなに愉快なる春の日に、マアどうして櫻の花は靜なる心もなく、あんなにいそがしくあわてゝ散つてしまうのであらう。さて〱惜しい花ではあるわい。

久方は、ひかりの枕辭なり。されども此處にては、天といふかはりに用ゐたるなり。

漫錄

清少納言（承前）

小野利三郎

當時風敎全く地に墮ち、父子兄弟にして相反目するか如きは、毫も珍しからざりしなり。故に兄時を得れば、その方の人のみ時めき、弟時を得れば

又この方の人のみ時めきたり。榮枯盛衰は、實にその才德の關するところにあらず、唯その依賴するところのひとの盛衰なりしのみ。若し少納言の、阿諛にたけ、昨は吳に媚を呈し、今は越の歡を買ふか如き輕薄婦人ならんには、生活の終始を、榮華の間におきたらんは疑なし。紫式部の主は誰とかする、月の虧けたるを見て、我身の富貴圓滿には若かずと、そしりたる御堂關白道長の女上東門院なり。少納言の主はといへば、父道隆の薨去と共に光を失ひ、遂に不滿の中に崩れ給ひし定子皇后なり。二女の榮枯、固より知らるべきなり。陋屋に蟄居しをはりたるは、少納言の剛正にして、その主に忠實なりし證には用ゐるを得べし。驕慢の結果なりとは、氏を除きて首肯するものありやいかに。

大日本史列傳烈女の部にいはく、

清少納言、肥後守清原元輔女也、有才學、與紫式部齊名、仕定子皇后、被眷遇、皇后嘗後顧左右曰、香爐峯雪想如何、少納言即起褰簾、時人嘆其敏捷、皇后特嘉其才華、欲奏爲內侍、遣藤原伊周等說諭、不果、老家居、屋宇甚陋、郞署年少見其貧窶憫笑之、少納言自簾中呼曰、不聞有買駿馬骨者哉、笑者慚而去、著枕草子、行于世、

近來清少納言の傳を作り、その才華を稱するものありといへども、皆之を直譯せるのみにて、又他を知らざるものゝ如し。抑冬の朝に簾を捲き、秋の夕に郞署年少を慚死せしめたるが如きは、驚くべきことかは。實に當時四納言と稱せられ、漢の

四皓もいかでか是にはとまで稱讚せられし、齊信行成の輩も、少納言のためには、毎に驚かされたりき。

然るに紫式部その日記に少納言を評して、

清少納言こそしたりがほにいみじう侍ける人。さばかり賢しだち、漢字かきちらし侍るほど、もよく見れば、まだいと堪へぬことおほかり。

といひしより、少納言の才學につきて疑をいたくものあり。かゝる人は、枕草子を讀まば乍ち氷解すべし。漢字かきちらしなどそしりたれど、少納言は常にたゞ〳〵しき漢字に書きたらんも見苦しとて、假字にてかきしにあらずや、且式部の日記を通覽するに、總て我方なる人々は皆之を稱讚し我方ならぬ人、特に齋院方の人々をば、いたくいひ貶したり。少納言は、前に論ぜし如く、無二の皇后方なりし故、固より相善からざりしなり。加之式部等の當の敵にしたる齊院方と、折々往來せしよしは、枕草子にも見えたれば、さてこそ斯くはいひ貶されけるなれ。よし才女とはいへ、少納言とは到底肩を比ぶべくもあらぬ、和泉式部などを、非常に稱讚したるにても、其の偏見たることい知られぬべし。

又安藤爲章は、その著紫家七論の文章無雙といへる條に、

式部はまことに古今獨歩の才といふべし。いにしへより清紫といひならしたれど、清少納言は才氣狹少にして、さかしらだちたる跡あらはに、惡くげおほきものなり。同日にも論ずべからず。

と、嘗て物せし品定の序を節約して、こゝに轉載し、清少納言を紫式部の下におかんことを企てたり。蓋し安藤氏のかく批難せしには、多くの原因あり。一は式部に心醉せしより、二には少納言の行をにくみて、三には自家の所論と撞着を恐れてよりなり。氏の所論、即ち文章無雙といへるを强ひて主張せんには、勢同地位を占めたる少納言を貶さゞるべからざるべし。然れどもその所以も示さず、唯才氣狹少なりと罵り去りたるは、氏の執拗偏愛の性をあらはしたるのみ。又品行の差異を以て、文學上の地位にまで加へんとせしは。過失なり。古來清紫といひならはしたるは、紫女に源氏物語あり、清女に枕草子ありて、その文の妙なる、ともに上下し能はざるよりなり。即ちこの地位は、ともに文學上の功績によりて、得たるものなるをや。今この性行己の意にかなわぬところなりとて、之を褫奪せんとするは、いはれなき言といふべし。罪とすべきほどの汚行ありしならばともかくも。

（未完）

按摩は學びたりや（承前）

伊藤武壽

此時先生襟を正して靜に諭されけるは、按摩を下賤の業なりとは、貴殿の考違ならむ。成程盲目の者が、生計の爲に、人の手足を撫でさすりて、世を渡る術なれば、下賤の藝と思ふハ、一應然ること乍、余はそを言ひたるには非ず。凡て女子と云ふ者ハ、何時かは他に嫁ぎ、夫を持つべきもの

にて、夫を持たば、舅姑などには別けて善く事へ奉るべきは女の道なり。一家の内政を司りて夫を扶け、家内の和合平安を保ち、舅姑其他の機嫌を害ねざるやう務めてこそ、賢女とも良妻とも申すべけれ。去れば舅姑の病みたる時は勿論、不斷老の身の機嫌を取り、其の心を養ふには、肩を揉み背を撫でゝ勞はること最肝要なり。善き娘なり。賢こき妻なりと、世に稱へられんには、此の心掛有るべき筈なり。されば按摩の心得こそ要用なれ。詩歌管絃遊藝などは次の次なり。いかに貴殿は然思はずやとぞ申されける。主人は今しも傲慢の鼻を挫かれて大に赤面し、娘共々手をつきて恐れ入りたる旨を述べ、深くその失禮を謝びたりとぞ、ある物の本に見えぬる。

いかに、今の世の女等、此話を聞きて何と思ひ給ふぞ。今日は文明の御代にて學問技藝の道も大に開け、殊に女子教育法の如きは。一大進歩を現し、女子とて更〳〵男子に劣るべくもあらず。去れば世の女子を持たる親達は、他の娘子には露劣るまじと勵まし、娘は其朋友他人には一寸も後れじと心掛け、髮を束ねて書生となり、都に上ぼりて、種々の學問を爲すは、是れ昭代の美事にして、實に喜ばしきことなれども、多くの學生の中には其の心操の生意氣なるは、此の主人の娘に十倍し、半册のリーダーに生嚙りの英語を弄して、隣家の老婆を驚かし、一卷の日本外史を讀みて、はや四角張りたる漢語を使ひ、父母を困らせて誇る者も少なからずとかや。たとへ何程學問技藝に通じたり

とも、驕り高ぶるべからざるはいふも更なり。女子は女子らしく、優美温良なるとこそ望ましけれ。まして夫を扶け舅姑に事ふる心掛ハ、平生聊も忘るまじきとなり。今の世に娘持ちたる親達は、室先生に叱られたる主人の如き者少なからねバ、余は一際の注意を望むなり。また苟も文明の教育を受けらるゝ世の令嬢達には、深く自ら省みて、徳操品行を磨かれ、適れ賢婦良妻と仰がれんことを願ふなり。縱令按摩の藝ハ學ばずとも、舅姑の心を安んじ、夫を輔け子を育てゝ、世に有爲の人をつくり、益我日の本の光を添へんこそ、大君の大御心にも適ひ、女子の本分にも合ふべけれ、昔話を思ひ出て、今の世に思ひ當る節の多き儘に、よしなし言を繰返して、世の若き令嬢だちに告るになん。

楠公家訓

綠園主人

凡子弟を教育するには、庭の教に若くものなし。庭の教善からざれバ、如何に完全なる學校いかに純良なる教師と雖も、之を矯正すること難かるべし。往古より忠君愛國の士、指を屈するに遑あらざる程多しといへども、楠の公の如きは未あらざるべし。而して子孫に至るまで、一人の君に背くものなし。是他なし。庭の教の善きものあればなり。草木を殖うるに、土地の肥瘠を擇ばざれば、其の完美なる果實を得ること能はず。庭の教の人に於ける、猶地の草木に於けるが如し。庭の教善良ならずして、子孫の完美

を得んと欲するも豈得べけんや。已に楠公家訓此の如きものあり。彼の如き楠氏子孫の忠良を見る亦宜ならずや。然れども楠公家訓は、楠氏一家の專有にあらず。苟も菊水の旗を仰ぎ、湊川の流を汲まんと欲する者、此の家訓を以て己の家訓となし、已の子孫を教育すること此の如くならバ、假令楠氏には及ばずといへども、亦以て忠良の子孫を養成することを得べし。今楠公家訓を數段に分ち、一々之を説明して、世の父母たる人に示し、之を以て楠公家訓とせず、己の家訓として、子孫を教育せられんことを望む。

極樂をねがはんより、地獄を作るな。

綠園云、彼の肥馬に乘り、輕裘を着、馬車を驅り、玉樓にすむ、誰か之を願はざらん。食前方丈にして、山海の珍味を備へ、糸竹其の心を樂しましめ、歌舞其の耳目を悦ばしむ、誰か之を望まざらん。之を願ひ之を望み、遂に其の身をして貧窮困苦の境に陷らしむる者少しとせず。これ極樂をねがひて地獄を作るものなり。「花のいろはうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」

立身をおもはむより、御恩をわするな。

綠園云、善きが上にも善からん事を願ふは人情なり。然れども、此の情をして止まる所なからしむるときは、德に背き道に戻る行を爲すに至る。世人大方、名を得利を貪る事にのみ汲々として、己は如何なる恩により、誰の德によりて、

今日生息することを得る所以を顧る者なし。故に子として父を法庭に訴へ、妻として夫を侮り、下として上を輕んじ、稍もすれば臣として君に背く者あるに至る。此己の立身のみを思ひて、御恩をわするゝによるなり。苟も忠良善美なる臣民子孫とならんと欲せば、必先我が身の上を日々に三省し、各其の應分の力を盡し、君父の御恩に報ゆることを務むべきなり。御恩を忘れて己の立身のみを思ふ時は、身を怨み人を恨み、遂には君父を怨むに至る。愼まざるべからず。

「ものゝふの臣のをとこは大君のまけのまに〳〵聞くとふものぞ。」

（未完）

楢の舍歌がたり

富田馬太

僧似雲和歌を詠みて難を免る

似雲法師は、和歌の名人なりければ、今西行と呼ばれけり、或時、伊勢の國桑名の海上を船にて渡られけり、乘合の人人甚多かりしが、船渡中に至るとき、金財布を失ふ者あり、さま〴〵詮議すれども見えず、これ必定法師のしはざならんと、ひそ〳〵語り合へり、法師いと〳〵物憂き事に思ひ煩ひ居たるに、「くるしみの海をわたればすみ染のそでにもかゝる沖つしらなみとよみて、船ばたに張附けられけり、賊の別名をも、しら浪といへば、かくよまれしなり、乘合の中に、從者など多くつれたる武士あり、此の歌を見て感歎斜ならず、御僧に濡衣きせまゐらしゝこそ、いとをしき事なれ、いで詮議してまひらせん、と若黨仲間などにいひ

つけて、船中のこる隅なくさがさせたるに、海上なれば隱さん樣もなく、やがて誠のぬす人わらはされてけり、錢はもとの主にかへさせつ、賊をばからめとらんとするに、法師さま〴〵わびければ、やう〳〵事濟みけりとなり、力をもいれずして、天地をうごかすといひけんは、實に左る事ぞかし、

僧契仲淸水谷實業公を師とす

契仲法師京都にのぼりて、堂上には歌よみ多しといふことを諷して、位山みねの梢にさく花はわがしきしまの麓にぞ見るとよみけり、これ淸水谷實業公の耳に入りしかバ、直に法師をめしよせて、汝は甚高慢なるものなり、何とて左樣の歌は詠みたる、と甚しくしかりつけけり、法師冷笑ひながら、當時は堂上の御歷々より、地下の野人に歌よみ多し、然るに地下は取るに足らぬものなりといやしめたまひて、選集にも入れられず、公家衆には格別巧なるが有りやといふに、反つて下手のみおほしといふ、否々左にてはなし、假令いかほど名人たりとも、地下といふものは、誠の歌の情を知らねば、名歌よむことは叶はざるもの也、公家衆には特に許さるゝ秘傳有りて、敷島の道の奧處に別け入らるゝものなり、其方など、なか〳〵知ことに非ずといはる、法師なほ屈せず、さらバ題をたまはれ、即席によみて御目にかけんといふ、さらばとて双峯鹿といふ題をたまふ、やがて「ひとかたはもし山彦のこたへかときけば誠のさをしかの聲と口ずさみけり、公之を聞きて、片頬に笑を含みながら、されば地下はいやしきものな

れ、幽玄の躰をわきまへず、誠の感情をあらはすことを知らぬ者かなといふ、法師いよ／＼胸せきて、さらば如何によみてんと問ふ、今なほしては得心有るべからず、まかりかへり、篤と相考へ、よみなほして持て來よとなり、心得がたく思ひつゝ、立ちかへりて、四五日がほど、とぢこもりて考へられしかど、得思ひつかず、再公を訪ひて、いろ／＼工風をこらし給へども、別に名句もいで給はずといふ、さればなほして得させんとて、「ひと方はもし山彦のこたへかときけばをしかの啼きかはすなりと下の十字をよみかへて、此の通りならねは、幽玄の感情にあらずといふ、法師一唱三嘆して、感涙をながし、今まで我慢にも、堂上の風とて別になきものならめとこそ、嘲りつれ、いと口惜しき事にも侍るかな、面目なき事してけりと、それより師弟の禮を執りて、益和歌をはげみしといふ、契仲法師はかの人だに、かゝることは有りけり、あはれ今の世の中には、堂上地下のへだて、師傳秘説などいふ、をこがましきことは無けれど、尚むかしの惡しき風習は殘り居れり、歌道のためをしむべきことになん、

伊勢と蘆庵と

むかし伊勢といへる女の歌よみありけり、くらしむき思はしからずなりけるにや、住みなれし家を賣らんとて、「あすか川淵にしあらぬ我宿もせにかはり行く物にぞ有りける」と詠みけり、飛鳥川といふ川は、昨日は瀬かと思へば、今日は淵と變る、其あすか川の淵にあらぬ我宿が、錢にかはり行く

よ、さて〳〵と歎をこめしなり、小澤蘆庵も名高きうたよみにて、四天王の隨一なりけり、或夜いたく更たけたるに、門を叩く者あり、何者の何しに今ごろ來りたるにか、と戸をひらけば知れる人が、錢三つ借してよといふなり、あやにく翁のもとにもあらざりければ、隣より借り來りて、わたすとて、「くやしくもなにはのあしのみつをなみこと浦かけてからしつるかなと詠みけり、錢のことをあしといひ、三つを御津に、刈るを借るにいひかけしなり、此の兩首何れも狂歌じみたれど、時につけて面白きものなり、誠のうたよみは、賤しきことを雅にとりなすとは、これらを云ふべからん、

（つゞく）

白河樂翁公茶室壁書

椿秦一郎寄贈

うつはものは、垢つかざるやうに日々きよむへし、よその道具の批判せす、持傳しを手入すべし、掃除は日々たるべし、さはらさらん蜘のゐなと取盡すべからす、釜の湯ひとひさくくまば、一ひさく半水をさすへし、客に對するも、茶たつるも、法にはなれす、またなづまずほどをうるを第一とすへし、あしきと思ふ道具のよき所を見、よきと思ふうちにあしき處を見しるへし、

文林

竹霜　東久世通禧

呉竹の葉わけの風の身にしむは
　千ひろの影にしもむすぶらし

行路梅

道のへの梅さきにけり行きかひの
　いくらの人の袖にはふらむ

都立春　黒田清綱

百しきのみかはの水の朝けふり
　かすみとなりてたてる春かな

詠史

かきくらしふれる雪にも
　子を思ふ心はかりはうもれざりけり

詠史　長坂廣文

舩の上の雲のはたてのなびかひに
　色めきわたる四方の海原

女鑑をよみて　花井稻禪

明らけき月も物かは女鑑
　常にくもれる影の見えねば

健勲神社　師岡正胤

古ゆ今のをつゝに　いさをある人は多けど
しわざある臣は多けど　かしのみのひとり優て
しつはたを織田の大臣　無類ためしなき臣
足利のしこの醜臣　天の下事執もちて
世の中はみだれに亂れ　しこ臣は國の大城に
しこ法師玉のうてなに　おのかどゝ誇り驕りて
天皇のいます大宮　皇神のいます神宮
三墻くち鳥ゐくつれど　かへりみる人なき時に
しつはたを織田の大臣　天皇の命かしこみ
醜臣をきためまつろへ　大宮をいかしく造り

して法師やらひ言向　宮柱ふとしくたてゝ
神稜威皇のみいづを　天の下四方にしらせし
無類いさをある君　ためし無しわさある臣
然れこそ今のをつゝに　古のいさをゝたゝへ
朝廷ゆみことたまひて　神健勳の宮と
たふとみますも

すまの友（承前）　何たに子

廿八日　天氣よし。いかにもあつさつよくて、晝は外へもいづる心ちのせねば、とかく枕にちかしくなりぬ。夕よりは、例の浦づたひの樂しさいはんかたなし。

しきつめし玉のうへゆくこゝちして
　まさごに淸き月をみるかな

すまの浦はまの眞砂をしろかねの
　玉になしてもてらす月かな

雪にとひ花にちきりしふる鄕の
　友なつかしきすまの月かけ

あやにしきおり出すかとおもふまで
　月影きよきすまの浦なみ

すまの浦にかりずまひして淡路しま
　ゆらのみなとを月にみるかな

月淸くきしの松かせおとたてゝ
　心もすまのやどぞたのしき

すまの浦月の夜ごろはおのづから
　ことのはさへもうかび出けり

ゑがくともおよはじ秋の月影に
　あやおり出す須磨の浦なみ

月の照すまのまさごをふみ分て
　清きことはの玉をひろはん

廿九日　天氣よし。此わたりは今も昔のまゝにて、けふしも所々の家にて、うらぼんゑのかざりつけをなせり、ことに家主のかたにては、新ぼんのよしにて、朝より人の出はいりおほく、夜になりては百萬遍をとなへ、家内中にて順禮の歌をうたふ。又近き所にては、男女うちまじりて、ぼんをどりをゝどるもありていとにぎはし。

三十日　くもり。けふは大きにしのぎよければ、十時の滊車にて明石へ行、まづ柿本の神の宮にまうづ。此ころ御社をあらためつくりていと淸し。かのほの〴〵との歌の下にみすかたをゑがきたるを求て、

ふる郷のつとになるべきことの葉の
　玉をさづけよしきしまの神

此神の守給へはよろづよも
　かさえ行らしことのはの道

山を下りて、長春樓といふ料理屋にて晝けものす。夫より魚町を見ながらあるく。賑はしき處なり。もとよき人々の住しあとならん。石垣など所々に見ゆ。其まゝ田地となりて、いねのはいきほひよくみのりてあれども、むかひに高く見ゆる城の、そこゝやれたるさま、何となくあはれなり。

きてみればあはれもふかき草むらに
　晝もきこゆる虫の聲かな

四時半の滊車にてかへる。此日東京より小宵武き

たる。

三十一日　天氣よし。武朝より下男をつれて海に入。岩のなければ、波打きはしづかにて、しほのうつくしきをめつらしみ、かつ魚のおほくあつまり、ちかき所にうき出てはぬることおびたゝしきを見て、かぎりなくよろこぶ。小鯛きすなどつりてかへる。

二日　くもり。須磨の町をあるく。かのすますたれをかけたる家を所々に見る。さきつとしよりはすくなくなりぬとぞ。

三日　くもり。八時の滊車にのりて姫路へ行く。石の寶殿をはじめ、曾根尾上別府などの古松をみる。いづれも枝葉しげりて美事なり。

見渡せばともにしげりておのづから
　むつましげなる相生の松

中にも曾根の松を第一とおもへり。手枕の松はあまりにまくらぎのおほく、其上手入のあしきにや。古葉のおほく殘りて、おもひの外見をとりはしつれども、めぐりの石垣、又梢にこけのふかく生たるを見れば、ことに老松ならんとおもはる。

歸路は賀古河より滊車にのる。賀古河は昔行きし事のあれども、鐵道の出來し故見覺なし。

賀古河の水の底にもはたとせの
　昔のかけはとゞめざりけり

（未完）

雜報

●心樂しき年の初　思へば去年の十月の末つ方なりき。美濃尾張の大地震に、人も家も數多そこなはれぬと聞きつる折の痛はしさよ。畏きわたりの御事は、申し奉るも中々にて、上は司ある人々より、下は鍬執る男、機織る賤に至る迄、一つ思ひに哀を催しつゝ、飲み食ふ物さへ喉には下らざりき。其の時の心には、年立ちそめぬる今日の樂、夢にも思ひ掛けざりしなり。雲の上びとは、此所の酒宴、彼所の會合と、招き招かれつゝ、轢らする車の音のいとしげく、又下ざまの者等も、己が身の程につけつゝ、何くれの遊びのいそがはしくて、今は其の事に物食ふ暇もなかるめり。況して、年若き女等の心は如何ならむ。去年の暮、強いて望みて求め得たりし衣の着初の、先いと嬉しきに、櫛かざし根かけ、さては穿く物持つ物に至るまで、思ふに任せ好むに從ひて、飽かぬ事なく、足らはぬ事なく、淸らを盡して鬪へいでたる、何心地かはせむ。羽根つく少女、鞠つく童女は、大路にさへ滿ちぬ。骨牌とり、花あはする姫とね等も、奥まりたる殿にいと多かめり。往來の人に物言ふは、羽子板にて帽子うち落したるを託ぶるにもありぬべく、つきつる鞠の蹴やられしを腹立てるにもありぬべし。白き物着けたる顏の少し斑に見えつるは、夜べの花合、今朝の歌骨牌

に負けゝむ折の、墨の名殘を止めしならむ。多きが中にはかゝる過も少からざるべし。さても樂しかる今日にはあるかな。　大君の千代の始を祝ふとしては、酒宴も可し。會合もすべし。たゞ望む。世の人等よ。かゝるうれしさその中にても、哀しかりし去年の心を失なひそ。年に一度の一月には、善き衣きるも可し。面白き遊びもすべし。只、希ふ。世の女等。其の樂しさを思ふにつけてハ、底ひなき　君と親との御惠を、ゆめなこゝろに忘れそとよ。

●卒業式　東京府高等女學校にては、昨年十二月廿日、知事の臨席を仰ぎて、いと盛大なる卒業式を行はれたり。其の榮譽を荷ひたる生徒は、四月に第一回の卒業生として十五名、十月に第二回の卒業生として三十八名、合せて五十三名なりきとぞ。さて同校は、去る明治廿二年の創立にて、當時天下の女學校は、多く敎育の方針を失ひ、學生の醜聞到る所に囂々たりしも、獨世潮の表に立ちて、其の航路を過らざりしを以て、一惡評のこれに及ぶものなきのみならず、武陵の桃源とまで稱賛せられたりき。されば吾人は、夙に望を同校に屬し居たりしに、今めでたく卒業生を見るに至れり。語を寄す。同校卒業生諸氏よ。世人ハ諸氏が將來の行爲を視て、同校の果して桃源なりや否やをトせむとする者の如し、良敎師賢妻母、これ實に諸氏が終生の目的にして、吾人が最大の希望なり。

●女の武藝　昔戰國の世には、武士の妻女たる

者、柔術擊劍はいふに及ばず、薙刀鎖鎌の使ひ方に至る迄、大方の武技は皆之を習ひたりき。その時の有様にては、父を補け夫を助くるとして、誠に已むことを得ざりしなり。さるを、いまの世に當りて之を學ばする者ありと聞くに、吾人はその必要を認むること能はざるなり。さりとも女權擴張とやらむを圖らするには必要なるべきか。さては父を補け夫を助けしむるにはあらで、父に抗し夫に敵せしむる者なり。吾人は、女子社會の風俗紊亂して、貞淑閑雅の美德の日に〱衰へ行を憂ふ。然るに之を導きて、益粗暴の域は赴かしむるは何事ぞ。よし其の目的は、外に善美なる者あるにもせよ。方今女子敎育の急務とすべきは、之より外には無き者なりや。物好するもほどこそあなれ。

●そゞろありきの記　去年の暮つ方、新年の用意のために、かりのやどりをたちいでゝ、三番町にいでぬ。右側の破れたる家のはのぐらき燈の下に、十二ばかりの少女裁縫してあり。傍なるは母なめり。小臼をひき居り。少女に、「よく心をつけてよ。若ひが縫ひもあらば、正月になりて先生に見せん折、汝の恥のみならず、いみじき母の恥なりかし。そのところさてはわろし。このところはかくせよ」と、おのが仕事のひま〱にいひをしふ。少女もうなづきて母の敎にしたかふ。あはれ。この母の素性はいかなる人ならん。この少女のゆくさきはいかゝあらん。いとゆかし。上六番町にさしかゝりぬ。いと枯ればみあやしげなる聲

して、常盤津とかいふやうのものを唄ふものあり。聞くとはなしに立ち止れば、戸のすきかげより、四十ばかりの女の前に、十二三ばかりの少女の、三味線もちて居たる見ゆ。こも母子なるめり。老女は、「汝の覺わろきにもほと〳〵困じはてつ。こゝはかくうとふところよ。今の如くては、正月のおさらひには覺束なし。徒に人笑はれとならんよりは、おさらひは斷りてよ。あら腹だゝしや」とさけぶ。少女はおろ〳〵聲に、「猶ゆきたし」とねがふ。老女けしき少しゆるみて、「さらば命にかけて復習へ」と答ふ。少女またうれしげに三味線とりあぐ。あなうたて。この母子のゆくすゑいかゞあらん。　（未完）

●新年附錄　本號の新年附錄として掲げたる松のさかえは、卷の尾にも言へるが如く、今の權掌侍硯所敎子の君が、昔の筆の跡にして、己が仕へられし薩摩の姫君の、嫁ぎ行き給へる旅の道すがらの事どもを書き記されたるものなり。されば、こちたく議論めきたる敎訓にはあらねど、善く讀みよく味ひなば、其の心ばへの貞しく忠實しきは、今の世の女等の身を修めむこよなき鑑ともなりぬべし。又その筆路の、優にやさしく典雅なる、古の紫式部清少納言にも肩を比べつべくて、今の世には容易く得難かる心地ぞする。あはれ、世の女等よ。この書をば、朝な夕なに繰りかへしつゝ、心を文字の外に求め給ひてよ。さては、文章かく知識を得たまふのみにもあらざるべくなむ。

餘芳

星月夜物語

愛馨散史

箱根山の厄

こゝは海道一とその名も高き箱根山にて、往き交ふ道の狹きに、荊蕀さへ生ひ茂りて、こなたかなたより蔽かくしたれば、足の蹈みところも定ならず。況して今朝は、霧いと深く立ちたれば、少し離れたる所はあやもなし。先つ頃の戰爭に馴れつる武士にても、ひとり往來せんは心地惡しかりぬべし。かゝる處に、衣服ばかりこそ汚れたるを着たれ。年はまだ二十を超えしとは思はれず。容貌の艶麗なること世にめづらしく、女ならましかば、これや傾國の美人ならむと思はるゝばかりの好男、あへぎあへぎ登り來りぬ。いかに物淋しくも、恐しくもおぼえたりけん。むづかしげに垂れかゝりし鬢を、掻きあぐる手に、はふり落つる涙のやどりいとしげかり。行くまゝに、彼方の峯、霧の上に見ゆ。此方の荊蕀の中には、世はなれたる女郎花。

をりから殊にうしろめたく見えたり。山の眞中にいたりし頃は、日も中空にさしのぼり、雲も霧も隔てあへねば、四方の景色眼もはるかなり。思ある身にはそれらのこと眼にもとまらず、如何にして過にし方はすぎてけむ。さても危くなどのみ、しはしは足もとまりぬ。少し下りたる所に關所あり。さてはとをのゝく心や足、かねて期したることとなりけり。何今更に。

などやう〳〵に踏みしづめ、用意したりと關契を示しければ、唯顔うちまもり頷首きたるのみにて、關守も思儀なく通しけり。

はや往くさきには關所なしとか聞けば彼所へも遠からぬよし。鎌倉を出でしより、心にかゝりこの關も。鶴ケ岡の神の御守ならでよもかくたやすくは。神の御守ある上は、往くさきもいと心やすかるべし。

とひとり言つゝ心も空、足さへ快くあかりければ、僅の間に四五町が程もあゆみけり。その時うしろの方より

旅の女しばらく

と呼ばれければ、吾知らず

妾にか
とうしろを見むき、おの裝姿の心つきし時は、はやも縲め身となりにけり。
唯あからさまの人にても、久しく見ざれば、戀しく思はるゝに、況して其の御陰を力と頼みたる權中將の、修禪寺に下り給ひし事なれば、御名殘の忘られ難く、そなたの空をのみ眺望めくらし給へるに、ゆくりなく、松殿待從おとなひて、權中將のあしき振舞し給ひしも、皆これ局の勸めしわざなりけり。後世の誡に、由井ヶ濱にて斬に行ふべき由、大政所より上使のむねを傳へけり。

局は、今更の如く悲しかりしも、又よく思ひめくらすに。
君の惡しき御ふるまひは、皆妾の勸しわざとな。君の御爲にとて、涙を流して數度諫め申した事は、人の能く知れりし事なり。こは、必す北條殿の妾を惡みて、失はまほしく思へど、世の批判をおそれ、かくは、申しおこし、妾に疾く死ねかしとの計にこそあらめ。なき名をとりて、死去らんは、後世の耗も覺束なけれど、兎ても角ても生長らへて、樂まるべき身ならねば、無念ながら、いさぎよく自殺せむ。

と、あはれにも、思ひ定めけり。

侍従は、かくとも知らずや、私の談に。

君も、下り給はむずる折には、諸共にとおぼし寄られたれど、はや世の中は思ふに任せず。今は、とも知らせ給ふとの得ならざりける事の、常に本意なく、口惜しくおぼされ、遂には、忍びあへさせ給はず。とく局をも、下してよ、と大政所へ申おこし給しかば、此處にあればこそさるとも云ひおこすなれ、と斯くは、にはかに罪なひ給ふなるべし。君の申しおこし給へるも、げにことわり、御前に侍へるものは、あやしき賤の女三人四人ばかり。警固のものなどは、遠くにあり。聞ゆるものは、唯猿などの聲のみにやあらん、何はとまれ、命だにあらば、下の帶の又めぐりあひ奉らんとは、強ちのねがひにはあらねど、今度の罪の決めこそはと口惜しくも、いとほしくあれ。

などねもごろにかたらひて、歸りけり。

ありがたき君の御思より、さては、かくなりけるにか。警固の人も、遠くにありとや。いかで御前に侍り、朝夕の御前の食物も、あやしき賤女には調へさせず。

など思ひよりては、にはかに命の惜しくなりゆき、清野には、文もて知らせ、警固の人の目を忍び、修禪寺へと志し給へる夜、あやしき老翁に、男の衣服と關契とを惠まれたるに、神かとばかり思はれて、それを力にこゝまで來りけるに、僕の心のゆるびより、紲の辱をうけ、その夜の中に韮山の城に護送れけり。

前回の正誤

頁行	誤	正
(八十八、七)	憂きふしけしき世に	憂きふししけき世に
(八十九、八)	背悖りもやむ	背悖りもやせむ
(九十、八)	心細き五日は	心細き五日の月は

すくれたる御歌ども撰出すべかりしを、いまたこと〳〵くあつまらぬよしなれは、そのことは次の女鑑にて公にしはへらむ。

十二月廿八日夜　落合直文

をしへの庭

明治廿五年一月　題

歌題　待鶯

文題　簾をかゝけて雪を見る記

歳暮述懐

まりうたを母にならひし古しへハ
くれ行くとしも嬉しかりしを　廣田とめ子

幾よねて春やきぬるとたらちねに
とひつゝ待し時もありしを　高井　孟子

年の市に羽子つく板を買ひとりて
わが身はかりの春は來にけり　松本　春子

綻ひし衣つくろふ程たにも
うらはつかしき年の暮かな　加納山良子

はかなくて今年もくるゝとし波を
のとかにのみもわたりつるかな　小池　敏子

今年はと思ひしものをおはれ又
なすことなさて年はくれけり　江崎みさ子

なしえたる事さへ無をいたつらに
ことしもはやく暮んとすらむ　門井とよ子

今年こそ今年こそはとおもひつゝ
今年もたゝにくらしつるかな　落合　操子

暮て行月日おもへは今更に
身のをこたりのなけかるゝかな　芳川　竹子

おる機に心せはしく讀む文の
ひまたにわらぬ歳の暮哉　青木さん子

いたづらにすぎし月日を今更に
數へてをしき年の暮かな　楢崎　松子

よどみなく流るゝ水のそれならて
くれ行年のおしくもある哉　柚原まさ子

月にあかし花にくらして一とせを
わたにすこしゝことをしそ思ふ　木村美津子

かねてより思ひしことの半はさへ
はてぬに年はくれにける哉　木村彬香子

夢のごとことしも年ハくれにける
我をこたりのつもり〳〵て　安藤すゝ子

くれて行年は新にかへれとも
かへらぬものはむかしけり　増山喜久子

移りゆく花や紅葉を惜しみきて
年にもけふは別るべきかな　立野かく子

有りし世の今霄なからにその昔
おもへはをしき年のくれ哉　福田彌生子

思ふことゝをが一つもならなくに
ことしも年のくれにけるかな　大川まさ子

花鳥の春に近くとおもへとも
なほをしまるゝとしのくれな　岡部綾野子

數ならぬ身はまたなくに年の瀬の
一と夜の夢そはかなかりける　箕浦　花子

行年の惜しさやいとゝます鏡
うつるすかたの老ぬとおもへは　篠原　芳子

くれ竹のよにふしもなき我なから　清水まる子
さすかにをしき年のくれかな

いたつらに過したりとは思はねど　臼井千代子
さすがにをしき年のくれな

春秋をあたに過して今更に　久保田光子
くれ行年のをしくもあるかな

いたつらに今年も遂に暮にけり　大手さよ子
我身ひとりはなすこともなく

なしもあへす果なく暮て行く年を　遠江無名子
しはしとゝめんせきもりもがな

花をめて月をあはれと思ふまに　曾我部かね子
はかなく年はくれにけるなな

雪見に友を誘ふ文　江崎操子

いぶせかりしよひの雨の、いつのまにふりかはりけむ、今朝は、初雪の、折たがへたる花の、さきたらむやうに積りたるは、所せき我庭ながら、いといと珍らしうなむ。まして、野山のけしきはいかゝならむと思ひやられ侍るにも、かの上野山の雪、さては不忍池のけしきを打ながめ、例の温泉に物して、歌よみ、文かき、かつは、のどかに御物かたり、仕ふまつらほしう思ひ立ち侍りぬ。過ぎし紅葉がりの御歸さ、ゆかしきものに契りのたまはせしを、いざとく思ひ立ち給へかし、時過きて消えうせたらむには、いかにくちをしからむ。やかて御庭に、いとひ給ふあとをつくべく侍れば、その御心にて、またせ給ひてや。かしこ。

同　稲崎松子

けふしも、玉川のほとりなるしるべを音なはんと思ひ、朝とくおき出て、柴のあみ戸をおしあくれは、きのふまてちり塚の宿となり果し庭もせも、ふりしく雪に面がはりし、木〳〵の梢はときならぬ花咲みち、ねもいはぬうつくしさに、山里はさぞやと思はれて、ひとり行きなんもほいなければ、ともにおぼしたゝせ給はずや。あまりにせはしきやうに侍れど、此朝日のあざやかなるには、いふがひなくなり侍らんか、いとも口惜う侍り。いかで消はてぬさきに、いそがせてわたり給はすや。

同　大手さよ子

曉告くる山寺の鐘の音に、おどろきおきいて、外面をみやれは、いとはけしかりし夜嵐の名殘を、をちの高嶺にみせて、白妙に埋みたる様、えもいはす。斯るけしきを、家にのみみんは、むとくならんかし。いてや野邊のみ雪をふみわけて、かをらぬ花の散しくを、寒き袂にうけなんなと、そゝろに春ならぬ心の駒もいさみ給ぬるを、さもとおほさは、とみに御車よせさせ給ひてよ。あなかしこ。

て聖旨の在所を氷釋し臣民の本分を辨知するを得るの良書なり故に大に四方の高評を博したりしか本社は今般更に栗田翁の校閲を受け之を輯めて一卷となし以て閲讀に便にし益々此の書の普及を斗らんとす嗚呼全國大中小の學校其他教育に熱心なる諸彥等は勿論苟も志　皇室と國家とに存するの人々は一本を坐右に置きて熟讀翫味せらるべし

明治廿五年一月

東京麴町區平川町五丁目十六番地

國光社

松のさかえ



松のさかに

玉さゝの一よばかり、かりねにむすふ草まくらも、程へて後に思ひ出れは、其折ふし忍はるゝ習ひなるを、況て、かうためしすくなきたびの御ことは、なほ〳〵しうとも書とゝめおかさらんは、あまりにくちをしう、ものゝはえなきこゝちすれバなん。こぞよりもよほし給へりし御登りの事、何くれとゝこほりしほどに、ことし霜月はじめつかたになりて、御門出の式おこなはせ給ふ。かねては八月なかば過と、あまねくふれさせ給ひしかど、六月の末に、ゆくりなくえみしらがふねあまたおそひ來りて、みたちもむげに濱近ければ、姫君たちは、奥まりたる山里に移ろはせ給ひつ。其折はしも、みくにの軍いとつよう、神さへ力をそへ給ひしにや。さま

〴〵しき事共ありて、ゑみしらがふねいみじうたゝかひまけつゝ、あるは波にしづみ、あるは石火矢にくだかれなど、のこりすくなう打なされて、やう〳〵にのがれかへりしかば、昔より吹傳へたるみくにの風も、こと更世にひゞき渡りて、なびかぬ草木もあるまじかめり、さればほどなうもとのでと歸りすませ給ひて、二度むかふ櫻島も、春待えたるこゝちしつゝ、いよゝにぎはひまさりたれど、其などり暫しまぎるゝ事おほくて、此御いそぎの、かくはとゝこほらせ給ひつるなりけり。限なき御すくせといひながら、雲ゐのよそに立わかれさせ給はん程の御こゝち、思ひやり奉るもいとむねいたし。御とものの人々も、おのかじゝ別がたきほだし多かるべし。むすめはまだをさなけれど、中の君につかうまつりて、年頃になりぬれば、うしろ安く思ひ置にも、いまはとわかるゝ程のこゝち、かたみにいと忍びが

たし。

幾度か、思ひすつれど、いかにせむ。

こゝろのちりの、はなれがたさを、

あぢきなきことゞも思ひつゞくる曉がた、みそのゝたづの諸ごゑにうたふを聞て、

草枕、たびねにきかば、いかならん。

しもよの鶴の、子を思ふこゑ、

八日、辰のなかば計に出立せ給ふ。御よそひいとうるはしうけだかきを、三つの國たみこぞりてみ送り奉る。日はいとよく晴て、風も音せぬなみ木の松ばらを、はるぐ〵とみさきおはせて過させ給ふ御けはひ、大かたならずめでたきにそへて、おほけなくみづからがすくせまで思ひしらる。

こまつばら、朝立けふや、我君の、
　千代をかぞふる、はじめなるらん。

都より御むかへに參りゐし志げ子のよめる、

住なれし、浦のす崎を、立出て、
　雲ゐに登る、あしたづのこゑ。

水上の坂まで、おもと人たち送り奉りて、御さかづきなど參る。爰にて時移りぬれば、御供の人々とかうもよほし聞ゆるに、心あはたゞしうて、立わかるゝ程いま一しほなり。

せきあへぬ、淚の瀧の、水上は、
　たがわかれより、なづけ初けん。

夕つかた、苗代河につかせ給へば、れいのめづらかなるこまの樂どもそうし、鶴龜の舞とてかなづるさま、からめいておかし。御いもうとの君たちより御使參れり。盡せぬことゞものたまひおこすに、中々御もののおもひもよほされ給ふべし。

九日、朝まだきに立せ給ふ。霜いと白う置わたして、岡の玉ざゝ、かれの、すゝきなど、哀に見所おほし。こまつあまた生たるわたりにしばしやすらはせ給ふ程、人々おり立てひきもて遊ぶ。

子日だに、しらぬみやまの、姫こまつ、
　けふは君にも、ひかれつるかな。

かり初の御休み所も、青やかなる杉のはをもて、いとおかしげに作りなしたれば、中々なかやかたにいはるかに立まされり。日高くむかふたにつかせ給ふ。河のは

とりにて、けしきいとよし。所の人々あみなど打て、ふなやうのものもて參れり。十日、明るを待てみ舟に奉る。川ぎりたえ〴〵に、何となう、うぢの渡におもひよそへられてなつかし。さをとるまゝに、天の羽衣まれにきてなど、こだいなる舟歌うたふも、所につけていとおかし。新田八幡にまうでさせ給ふ。けさもいと霜ふかく、かちよりゆく人のもすそ、いみじうたへがたげなり。

朝日影、早もさゝなん霜をふみ、
　　こほりをわたる、かち人のため、

西方といふ所にて、ひるの御まうけす。はまべのけしきおもしろければ、はしちかう見渡し給へるに、うら人どもあびきしつゝ、いをあまた奉るいとけうあり。あくねにとまらせ給ふ。めのはらはども參りて、わざをき御らんぜさす。ひなびたれど、

見所なきにしもあらず。軒近く夕汐みちて、月のうつりたるけしきいはんかたなし。よもすがら波の音まくらにひゞきて、もの思ひもよはずに、いもねられず。

　　沖津風、吹とはなしに、片敷の
　　　袖にも波の、か丶るよはかな。

十一日、いつみにつかせ給ふ。里の子どもあまた参りて、ひなぶりうたふ。あくねのにははるかにおとれり。明日ひでのくにゝいらせ給ふべしと聞に、野山のけしきもながめられて、何となう名でり多かるこゝちす。かでしまにみつかひ立させ給へば、私にもせうそこなど聞ゆとて、心々にいとなみあふほど、よいたう更ぬ、十二日、雨すこしふれり。米の津といふ所まで、めのわらはどもしたひ参りて、れいの舞うたふ。御かづけもののいとこちたし。日たくるまゝに雨やまず。さか道など

のぼり下るも、みづからは風にだにあたらで、中々いと心ぐるし。

わが君の、千代のみかげに、かくろひて、

しぐれも雪も、しらぬ旅かな。

關をこえ給へば、さかひはるかになりぬること、ちして、さまぐ〳〵もの心ぼそく思ひつゞくる程、山河のいさぎよく、岩にくだけてながるゝをみて、

くだけても、終に歸らぬ、山河の、

水こそいまれ、かゞみなりけれ。

十三日、雨晴ぬ。けふ、此國に名だゝる三つの峠を越給ふべし。きのふのやうならば、いかにわびしからましを、かくのどかになりぬるとて、人々悦びあへり。ひねもすにのぼり下りて、いきもつきあへぬさま、みるめもいとくるしう、心にまか

せてかちより行わざもがなと、あぢきなうひとりでたる。

おり立て、岩ねふむより、つゞら坂、
人のちからに、ゆくがくるしさ。

十四日、けふ初雪ふりて、寒さいとたへがたし。山ぢのけはしき事、昨日にかはらず。

あら玉の、とし〴〵待し、雪をさへ、
いとふや旅の、つらさなるらん。

ゆく〳〵ふるさとのことゞも思ひやりて、

櫻島、みねにふりつむ、雪をみて、
ふるさと人や、我をこふらん。

今宵の御とまり、ひなぐとて出ゆなとある所なり。下りし時も爰にやどりしかど、いとくらく物おそろしくて、ゆあみもえせずなりしことなど思ひ出るも、其折のこゝちして、とし月の早さも、いま更におどろかれたり。

十五日、けふも雪ちりていと寒し。道のほとりに咲出たりとて、御ともの中より梅の枝を奉りければ、

萬代の、春をふくみて、けふ爰に、
　きみをやまちし。梅のはつはな、

八代川を渡る。舟あまたこぎつらねて、のり移るほど、いとものさわがしうのゝしりあひたり。やがてつゝみを行に、河風寒きこともものに似ず。

あづさ弓、やつしろ河の、川風は、

みを吹通す、こゝちこそすれ。

十六日、雪猶やまず。寒さも昨日のやうなれど、山ぢならねばいと心安し。はたの中道行ほど、わたの木に雪のかゝりたるをみて、

冬がれの、山はたそばの、つくしわた、
雪のつむにも、まかすなりけり。

夕つかたくまもとにつかせ給ふ。御やどりはさらなり。道の程も、いと清らにはらひしつらはれたるみ心もちひのほどもおろかならず。國のゆたけき事、はた思ひしられて、こゝろことにめでたし。

十七日、けふより道をかへて、鶴崎の方におもむかせ給ふ。所がらにや。此ほどよりも、一しほ寒さまさりて覺ゆ。大津といふ所に御やどりまうけたり。山陰にて、

谷河の音ものすごけれど、都ちかく聞なれし名とて、すゞろになつかし。

思ふかた、大津のさとの、名にしおはゞ、

　　みやこに通ふ、夢もみえなん。

十八日、朝まだきに立せ給ふ。まど石の里にてひるの御まうけす。庭のさまいとおもしろく、石をたゝみ瀧をおとして、池の心すゞしげに、夏ならましかばと覺ゆ。むかふには、あそがたけましろにみえて、ゑにかけるふじのやうなり。

東路は、まだしらねども、あそがたけ、

　　ふじのたかねに、よそへてぞみる。

十九日、あその宮にまうで給はんとて、夜をこめて立給ふ。里をはなるゝほど、御さきの火しらみ渡りて、明行けしきいひしらずおかし。

明近く、よは成ぬらし。ほの〴〵と、
　　ひまみえ初る、みねのまつばら。
けふも寒さたへがたう、さすがに日はてりながら、雪のちりかふ中を、数もしらぬものゝふ、いときらびやかによそほひて、ついでをみださずしたかひ聞ゆるさま、中々はえてめざましうみゆ。
君がゆく、道の光を、そへんとや、
　　くもりもはてず、雪のふるらん。
暮過て久住につき給ふ。道すがら、このさとの人々あまた出て、松どもともしつれて見送り奉る、いとうれしうたのもしきに、ことなる御覺えのほどもおもひしられたり。

雪深き、山ぢを照す、松の火も、
　　おもへば君が、ひかりなりけり。

なを雪をやみなくふると聞に、あすの山ぶみいかならんと、人々わびつゝねぬ。

廿日、けふもよをこめて出給ふ。思ひしよりは雪つもらず。寒さいとたへがたし。

遠近の、みねに朝日は、さしながら、
　　雪なほふかし。谷陰にして、

ひるのほどしばしをやみし雪の、暮近くなるにつけて、またふりみだれたり。

雪つもる、かれのゝすゝき、ふみ分て、
　　ゆく道遠し。野津原のさと、

二十一日、ひたかく立せ給ふ。けふはいとのどかにあたゝかにて、人々うれしみあ

へり。こし方の山をみれば、雪しろうつもりて、かゞみのやうなり。名をとへど、はか〲しうこたふる人もなし。

　かへりみる、遠のやま〱、雪ふかし。

　　きのふこえしや、何れなるらん。

申の時計鶴崎につかせ給ふ。爰より五里計行て、御舟にめさせ給ふへきなれど、いまだ御むかへの舟つかずときく、いとわびし。こよひはみ心のどかに大とのでもりて、御くたびれどもやすめさせ給ふ。人々も、髪ゆひ、は黒めつけなど、心々にいとなみあへり。

廿二日、けふも爰に御とまりなり。かで島に御せうそこ聞え給ふ。私にも文などつかはすべし。御舟いまだつかず。はた此渡りに、あやしのをのこども、数多うかゞ

ひありくなどきくに、いとものむつかし。いつまでかくておはしまさんとのみ思ひつゞけて、中空なるこゝちす。

亂あしの、かりねに詫ぬ。たづか崎、
　　雲井にさそふ、風もふかなん。

廿三日、けふもおなじ。夕つかた、かのみふねつきしときく、いとうれし。こよひはれいのことゝて、月待ふかしたれど、何方を東ともしらず。よなか過ぬれば、うたゝねのさまにて、みなよりふしぬ。

波まくら、浮ねなりせば、なか〳〵に、
　　しまねの月も、みてましものを。

廿四日、鶴崎を立せ給ふ。濱べのけしきいとおもしろく、松のすがた、岩のたゝず

まひ、ゐにかゝまほし。しの坂といふは、昔やま人ので打し所とか。白き黒きさゝやかなる石あまたあるを、わかき人々打むれてひらふ。こよひの御やどり高やかなる所にて、風つようあたるに、いづこもおろしこめたれば、いといぶせくて、なみの音のみ聞ゆ。

廿五日、いとよく晴たれど、風猶はげしければ、けふの御舟出いかゞなどあやぶみあへり。されど御日がらもいとよし。御舟はたすこしの風にさはるべうもあらず。まづかしこにおはしまして、み心のどかにをと聞ゆれば、午の時計はまべに出給ふ。守衛の人々は、爰より御いとま給るべければ、はまべになみゐてみ送り奉れるさま、いと哀に、こゝろの内思ひやられて、すゞろにものがなし。みふねの作りざま、からめいておもしろく、おましはさらなり、人々のつぼねまで、こまかに思ひ

まうけたれば、君にもめづらしう思はして見めぐらせ給ふ。いづこをもしら玉のやうにみがきたるに、清らなるかゝみをさへかけ渡して、旅のやつれもはづかしきこゝちす。御硯參り、御ごうたせ給ひなどして、れいのころ大とのごもれり。廿六日、風すこし靜りぬとて、明方よりみふね出す。つくしの内はさしもあらざりつるを、すはうのなだにかゝる程、風にはかにつよく、山のやうなる浪立さはぎて、さばかり大きなる舟のかたぶく事、風のむしろなどを吹まくやうなり。神の心のあるゝ海にといひけんも思ひ出られて、いとおそろしうわびし。暮過るころ、からうじてみたらひといふ所につかせ給へり。

昨日まで、あかずながめし、海原の、
　音もゝのうく、なりにけるかな。

廿七日、明て後み舟出ぬ。けふは風もなぎぬれば、屋かたを出させ給ひて、四方のけしきなど御覧ず。千舟もゝふね打こして、萬里のはたうを一ときに過行さま、いと〳〵めざまし。

餘りにも、みふねの道の、早ければ、
　　しまの名をさへ、とふひまぞなき。

御ともにありける中山何がし、

まほかたは、きのふの風に、吹かへて、
　　みこゝろさへに、ゆくふなぢかな。

と聞え上ければ、

たのもしき、浪の心も、あらはれて、

けふはひとしほ、すゝむみ舟ぢ。

日々のみなとにとまらせ給ふ。

廿八日、曉方よりこぎ出て、室の泊につかせ給へり。人々舟よりあがりて、いきかへりたるこゝちして、うれしみあふ事かぎりなし。あまたの舟の出入にぎはふさま、げにも名だゝる湊とみえて、いとゆかしきけしきなれど、うら風寒く、猶波にゆらるゝやうにて、こゝちなやましければ、立出てもみず。

廿九日、空いとよく晴たり。室をたゝせ給ふ道、賤か垣ねに梅の咲たるを、

室の津を、けさ立くれば、冬ごもり、

はるをもまたで、梅ぞ匂へる。

ひめぢにつかせ給へば、都より守衛の人々あまた御むかへに參れり。いとたのも

しうれしし。

朔日、此國に名だゝる所々見めぐらせ給はんとて、れいよりも早く出給ふ。そねの松、むかしのはかれて、かた計のこれり。植つきたるぞ、みどりさかえて、いとたのもしげにみえたる。

萬代の、後まで人に、とはるゝや、
なだかき松の、みさをなるらん。

石の室殿といへるは、むかしひるでの神の、一夜のほどに作り給はんとせしに、夜明ぬれば、すべなくて打れかせ給ひしとか。神代のありさまもおもひやられて、いとくめづらしき宮なり。

天の戸の、明るばかりは、千早ぶる、

かみもこゝろに、まかせざりけん。

高砂のほとりにて、御とものつかさ藤井何がし、さゝやかにおかしげなる松を植付て奉りければ、しげ子、

さゝげつる、此松にこそ、我君の、

千とせの色は、あらはれにけれ。

二日、れいのまだきに立せ給ふ。やうやうみやこ近く成ぬと思ふうれしきに、大方の空さへ、いとのどかに春めき渡れり。

九重の、みやこまぢかく、成ぬらし。

けふはあらしの、音も聞えず。

柿本のみやしろにまうで給へり。道の御神にしおはしませば、としごろあふぎ奉

りしかど、かう二度まうで聞えんとは思はざりしを、おろかならぬ御しるべの程、いとたうとく思ひしらる。

昔より、あふぐみかげの、いやましに、
　　ふかきめぐみを、うくるかしこさ。

三日、大くら谷を立て、やがて須磨のうらべにやすらひ給ふ。昔爰を過し時は、いとこゝちなやましうて、たぐひなく聞傳へしけしきも、心とめてもみずなりしかば、年月あかぬ事に思ひつるを、いとうれしきにも、其折のこと思ひつゞけられて、何となうもの哀なり。

立かへり、みればなつかし。昔わが、
　　そでぬらしつる、須磨のうらなみ、

高砂の、松もつぎゝと、なりしよに、
　　かはらぬころや、すまのうらなみ、

志げ子

すまのうら、通ふ千鳥の、身にしあらば、
　　ゆきてみましを。あはぢしまやま、

まひこのはまにて、おなじく、

うら風に、なびく姫松、たをやめの、
　　打かへしまふ、袖かとぞみる。

すま寺へもまうで給ひて、あつもりの筆のあと、其外むかしのよしあるものども御らんず。青ばのふえをみて、

しげ子

笛竹の、よのうきふしに、かれにけん、
　　青はもいまは、名のみのこりて。

兵庫につかせ給へば、都より、殿の御使谷村何がし參れり。やがてみたいめありて、御ありさまなど聞しめすに、いとうれしう、み心おちゐて、思さるべし。

四日、れいのころ立せ給ふ。みなと河なる楠公のはかをおがみて、

湊河、ふかき心は、くまずとも、
　　そでをぬらさぬ、人やなからん。

生田のもりいと神さびて、なにとなうむかししのばしき所なり。

秋風の、なでりをみせて、木本に、

とまるおちばも、なつかしきかな。

けさも霜深く、道はたいとけはしけれど、かゝる序もありがたければとて、やがて布引の瀧見にものし給ふ。所のさまいとなつかしう、千ひろに餘るたきの糸の、岩にあたりてみだるゝけしきなど、心ある人に見せまほしう覺ゆ。

みやこへと、いそぐ旅ぢも、立歸り、
こゝろひかるゝ、瀧のしらいと。

五日、西の宮を立て、難波津に入らせ給ふ。空いとうらゝかにかすみ渡りて、春のやうなり。

霜雪の、古としながら、のどけきは、
きみをむかへて、春やきぬらん。

しげ子

野も山も、けさは霞める、こゝちして、
　　きみがたびぢの、のどかなるらん。

爰にも、殿の御使束鄕何がし、御折ひつものもて參れり。所々のさゝげものいとこちたし。さばかり遠き御道すがら、事なくこゝまでおはしつきたる、神の御守りも一方ならず。人々のまでゝろはたいとことにおもほししりて、さるべきかぎりたいめ給りて、こまやかにねぎらはせ給ふ。

六日、みふねにて住よしにまうで給ふ。御いきほひいとことなり。濱べには、やがて御こし寄せてまち奉る。よつの御社をふしをがみて、

すみよしの、四のみやしろ、よとゝもに、

まもらせたまへ。君がさかえを、

たん生石にまうでゝ、歸らせ給ふみち、雨いさゝかふれり。

いにしへの、ためし忘れぬ、村雨は、

ふるもはるゝも、たのしかりけり。

七日、雪ふりていと寒し。此程より、姫君しはぶきのやうにおはしつる、なほをこたらせ給はねば、しばし爰にてつくろはせ給はんとす。都へも、御使して、其よし聞えさせ給へり。

八日、けふもおなじやうにおはします。

九日、みこゝろすこしよろしうおはしませば、あす出立せ給はんとて、御ぐしなど參れり。ながき旅ぢにやつれさせ給へど、なほいとあてやかになまめかしう、都に

おし出奉りて、やごとなき御かたぐ〵にならべ聞ゆとも、こよなうはおとり給はじかしと、たのもしう見奉る。としごろ忘れがたう思ひしふるさとに、かくおもだゝしき道にしたがひ奉りて、けふあすかへりなんとする嬉しきにも、昔の人々あらましかばと思ふなん、いとあかずくちをしき。

たらちねの、ある世なりせば、故郷に、
　かざるにしきも、うれしからまし。

十日、よ深く立せ給ふ。御先の火いと多くともしつらねて、中々ひるよりもめざましきこゝちす。濱のつゝみを登らせ給ふ程、ほのぐ〵と明行けしき、いとえんなり。

山城の、よどの川なみ、立かへり、
　うれしきせにも、ぬるゝ袖かな。

八はたの宮ゐをはるかに拜み奉て、

石清水、ふかき惠の、末みえて、
すみこし方に、かへるうれしさ。

ふしみにつかせ給へば、都より、小松のぬしいきほひことにて御むかへに參れり。君にもいとうれしう、み心つよう思はすべし。しげ子のよめる、

千代までも、君を守りの、こまつばら、
かげたのもしと、みそなはすらん。

十一月、けふ都に入らせ給ふべければ、み心ことによそほひて出立せ給ふ。いなりの御まへを過て、五條の大はし打わたる程、猶夢かとのみ思ゆ。みたちにつかせ給へば、殿をはじめ奉りて、爰かしこのみ使、ひまなう立こみていとにぎはし。

十二日、御しはぶきいまだおこたらせたまはねば、ひねもす大とのでもりくらし給ふ。

十三日、けふもおなじ。

十四日、けふ御日がらよろしとて、御ゆひのふの式おこなはせ給ふ。松ば重ねの御こうちぎ、紅の御ひとへ、こき御はかまなど、さま〴〵にうるはしう、めもおよばぬこゝちして奉り給へり。御使式部少輔何がしとかや。こなたにても、いみじうみ心遣ひしてもてなさせ給へり。御かづけものども思ひやるべし。

十五日、御こゝち大方さはやぎ給ひて、御ぐしなどけづらせ給ふ。殿わたらせ給ひて、みたいめあり。おほやけ事しげくおはします中にも、いとこまやかに思はしいたらぬくまなきみ心ばへを、君にもいと忝なうおもほししりて、まことの御ちゝ

君と頼み聞えさせ給へり。白拍子どもあまた参りて、今様まふ、いとおもしろきに、旅のつかれもわすれて、けうじあへり。御かづけものゝさま〳〵、いとおかしきさまにてせさせ給ふ。

十六日、御こゝちいよゝよろしうおはします。御参りの事、あすあさてに成らせ給へば、いと心あはたゞし。

十七日、けふも、何くれと、御いそぎに紛れて暮ぬ。

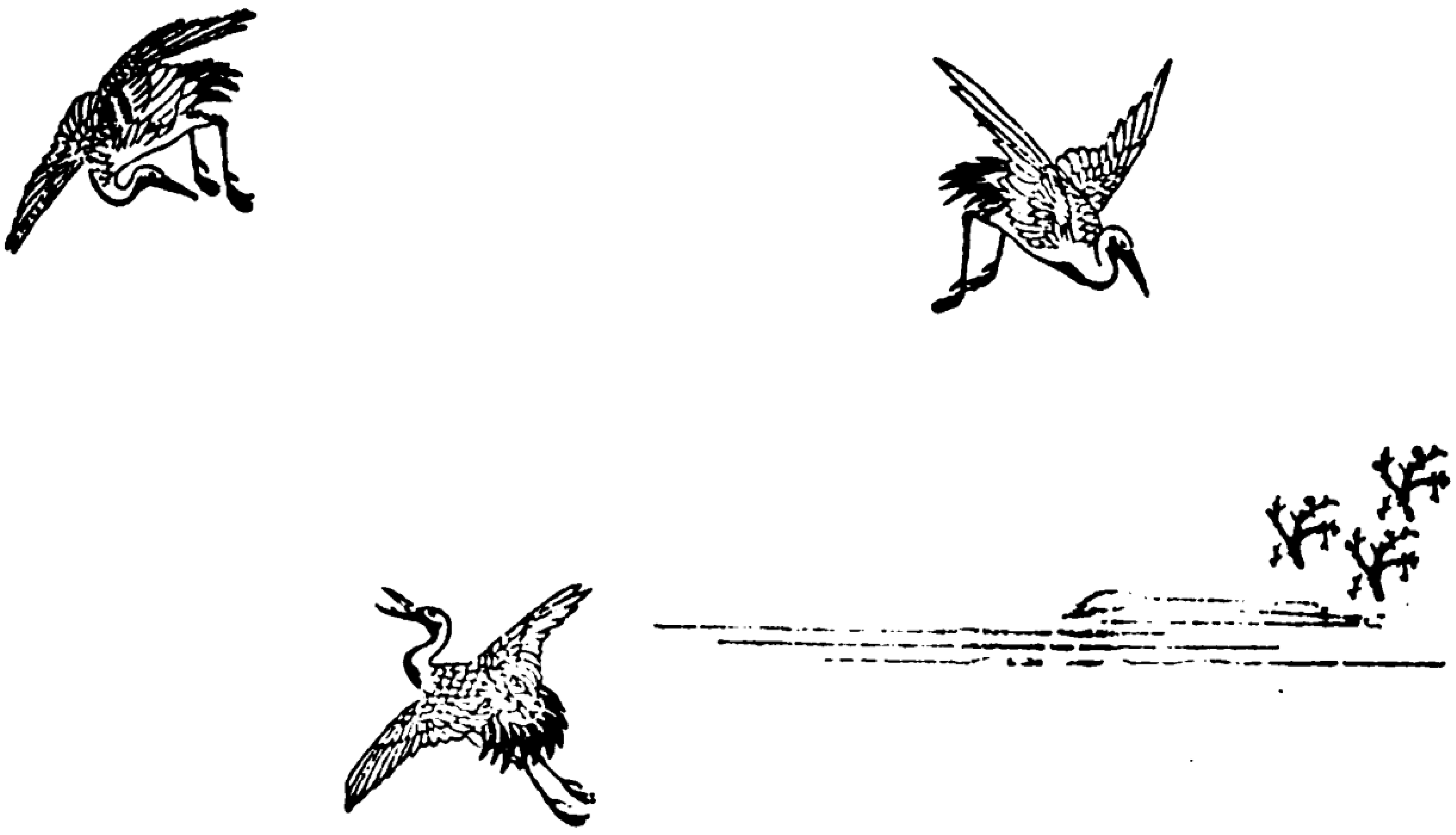
十八日、空いとよく晴て、千世のはじめの朝日かげ、うらゝかにさし出たり。辰のなかば計御こしよせて、錦のみたちを出させ給ふ。ちりもなくみがきしつらひたる都の大路を、はる〴〵とひきつゞけて、玉のうてなにまうのぼらせ給ふほど、昔の世ゆかしき御有さまなり。今宵の御儀式、しのびたる御さまにきこえしかど、猶

いと心ことに、まなびやらんかたなし。御なからひいとめでたう、思ひしにも増りて、あらまほしき御けしきなるに、此二十日餘りにや。御むこ君左大將にておはしますを、内大臣に上らせ給ふべきせんじをなんかうぶらせ給へるとか。物がたりなどに、こと更につくり出たるやうなる御幸ひ、ほぎ聞えさせんにも、ことのはのおよぶべきやうもなくてとぞ。

茂り行、みかさの山の、陰ふかみ、
　露ももらじと、たのむうれしさ。

たのもしき、松の榮に、ひな鶴の、
　千代のこゑこそ、今は待たるれ。

春子



編者附記　この松のさかえは、今の權掌侍税所敦子の君の、去にし年物せられしなり。今君が經歷の大畧を述へんに、君は文政八年、京都鴨河の東錦織の里なる林氏の家に生れ給ひぬ。幼きより、歌よみ文かくことに巧なり。十八歲にして父を喪ひ、二十歲の時、薩摩の人税所某に嫁がれぬ。後八年ありて、又夫を失はれければ、獨鹿兒嶋に下て姑に事へ、孝養怠なかりきとぞ。藩主贈從一位齊彬公其の才德を聞き給ひ、擢でゝ幼君の侍女となし、程なく老女に擧げ給ひて、春野と稱へしめられぬ。後家に歸り姑に事へ居られしが、公の養女貞姬（今高蘭院と稱す。近衛公爵の母君なり。）近衛忠房公に嫁き給ふに當り、再擧げられて姬君の傅となり、次きて近衛家に事へて、幾年月を一日の如く送られたりき。さて明治八年の秋に至りては、畏くも　皇后宮より内侍に召させられ、歌文の御相手と爲されて、正七位にさへ叙でられ、楓内侍と稱へて、今に忠勤怠り給ふことなし。本書は實に君が貞姬君の嫁行に隨ひ參らせて、京に上らるゝ折の日記なり。されば書き載せられしは、路すがらのはかなき事柄の樣なれど、熟々に讀みもて行くに、貞淑忠實なりし心ばへの、紙上に溢るゝ者あるを覺ゆれば、こゝに掲げ出でゝ、新年の附錄とはなしつるになむ。

國光第三卷第五號

目録

定價壹冊金貳拾錢
郵税金貳錢

●學階試驗科目講義全書出版

學階試驗科目講義全書

全六冊　特別減價前金九十六錢
外に遞送料金十六錢を申受

但分割講讀は左の代價に依るべし、又郵券代用は一割増とす

第一卷	古語拾遺講義	定價金拾五錢	遞送料金二錢
第二卷	祝詞式講義	同　金二十錢	同　金四錢
第三卷	古事記講義(但上卷)	同　金三十錢	同　金四錢
第四卷	職原抄講義	同　金二十五錢	同　金四錢
第五卷	土佐日記講義	同　金十五錢	同　金二錢
第六卷	祝詞作文法	同　金十五錢	同　金二錢

但し代金送附無之内は一切送本せず

明治廿四年十月　東京麹町區飯田町五丁目八番地　水穗會

追て郵便爲替は東京麹町區飯田町郵便支局宛振込の事

社告

本邦固有の女德を扶植し忠誠純良なる國民の母を養成する必要に迫り女鑑の始めて世に出てたるは實に去年の八月なりき社員才乏しく力微にして或は大方の望に適はざりしものあらん唯赤心事に從ひし結果は漸益江湖の信用を博し女敎の上に既に幾分の稗益を與へたり然とも顧みて女子敎育の實際を問へは滔々たる風潮の衝冒今にして大に之か救濟の道を求むるに非れハ其弊害底止する所を知らさらんとす則一回の發刊未以て時務の急に應するに足らず此に於てか自今更に發兌の數を增して五日二十日の二回となし聊本旨の貫徹を期せんとす本誌改良の目的固より之に止まらす漸を以て其の大成を期す讀者幸に社意の在る所を諒せよ

女鑑第五號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領收證を要せらるゝ方ハ別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

毎月一回五日發行

定價壹冊金拾錢
半ヶ年前金五拾五錢
壹ヶ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料 五號文字廿三字詰
一行拾錢

明治廿五年一月一日印刷
同 年同月五日出版

發行兼出版人 東京麴町區平川町五丁目十六番地 西澤之助
印刷人 同 長屋基彦
發行所 同 國光社

（遞信省認可）